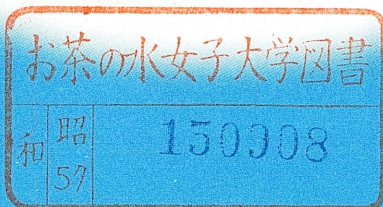
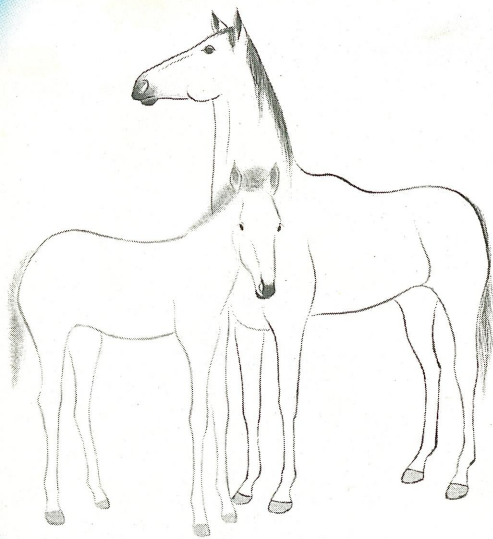
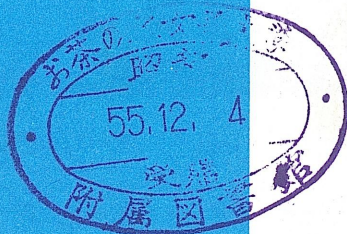


126
80

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

第八十卷第一号
日本幼稚園協会



1

好評発売中!!

戦後保育史〈全2巻〉

A5判・上製本 セット定価・9,800円

編纂 岡田正章・久保いと・坂元彦太郎・穴戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗

★日本で初めての“戦後保育史”です。

幼稚園・保育所・幼児文化の三面から展開されている戦後保育史は、日本で本書が初めてです。

★行政も現場の動きもよくわかる戦後保育史です。

法令や制度の背景、現場の受けとめ方などが浮き彫りにされていて、保育の歴史を総合的に理解することができます。

★豊富な証言による生きた戦後保育史です。

歴史の第一線で活躍された方々の証言により、当時の状況が手に取るようにわかります。

★貴重な資料がいっぱいです。

貴重な資料により戦後保育界の真実を伝える保育史です。全国各地の地方史も含まれています。

●第一巻●(昭和20年～37年)

第一編 幼稚園とその保育

- 第一章 敗戦後の混乱と幼稚園の再出発
- 第二章 保育内容・方法の充実への動き

第二編 保育所とその保育

- 第一章 児童福祉法と保育所
- 第二章 保育所の発展と試験

第三編 幼稚園と保育所の関連

- 第一章 復興期における模索と二元制への出発
- 第二章 二元化政策のもとで

第四編 学術文化

- 第一章 幼児文化

●第二巻●(昭和38年～51年)

第一編 幼稚園とその保育

- 第三章 幼稚園教育の再編成
- 第四章 中教審答申とそれ以降の幼稚園教育

第二編 保育所とその保育

- 第三章 保育所保育の整備と拡充
- 第四章 国民の保育要求実現に向けて

第三編 幼稚園と保育所の関連

- 第三章 幼・保の競合と一元化の試行
- 第四章 あらたな視点から幼・保のあり方を求めて

第四編 学術文化

- 第二章 保育室から見た保育文化
- 第三章 保育環境
- 第四章 保育関係出版物

発行 フレーベル館



第八十卷 第一号

幼児の教育 目次

— 第八十卷 一月号 —

© 1981

日本幼稚園協会

「幼児の教育」第八十巻を迎える……………津守 真……………(4)

創刊八十周年記念 連載インタビュー

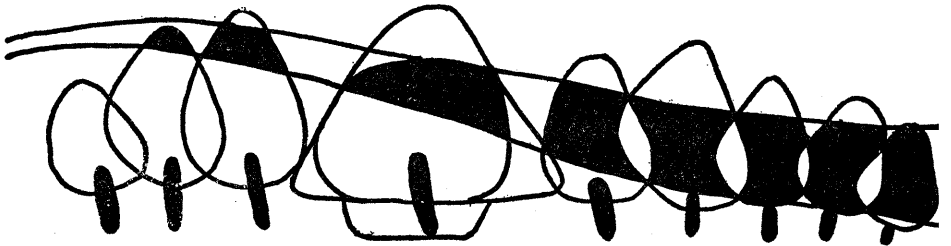
児童研究と保育へ1……………児玉 省……………(8)

保育の雪月花……………川崎 千束……………(22)

歴史人口学からみた生と死 一……………鬼頭 宏……………(28)

わたくしのシルクロード⑧……………横張 和子……………(36)

研究会だより……………立川 多恵子……………(43)



続・保育の中の小さなこと大切なこと……………守永英子…(48)

『復刻・幼児の教育』並びに懸賞論文募集のお知らせ……………(50)

子どもとのかかわり……………折原祥子…(52)

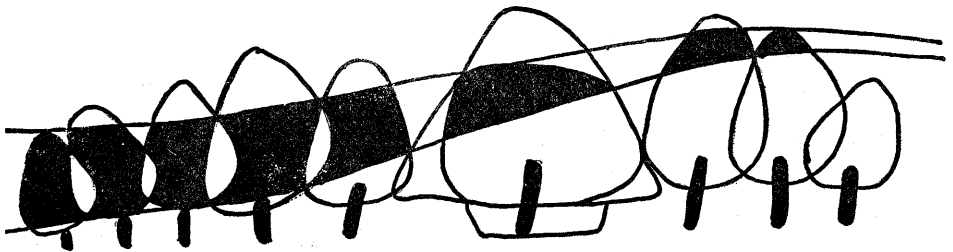
遊びと子どもの発達⑧……………加古里子…(58)

★海外文献紹介……………(62)

表紙・中村 宗弘

題字・比田井和子

カット・福田 理恵



「幼児の教育」第八十巻を迎える

津 守 真

「幼児の教育」誌は、本年で、第八十巻を迎える。

一九〇一年、明治三十四年の「婦人と子ども」創刊号から、昭和十九年までの四十四巻の復刻を昨年完行することができて、今年は、第八十巻を迎えることは、嬉しい。

まったく運命的なことと思っているのだが、私がこの雑誌の編集の責任を負うようになってから、二十七年である。

倉橋惣三先生から引き継がれた最初の編集会るときに、先生が云われたこと

がいくつかあった。いま考えてみるに、そのことは、現在、この雑誌の編集方針としていふことと変らないように思う。

その第一は、この雑誌は、人間の生活に根ざした保育を考へるといふことである。表紙の題字の上に、小さな活字で、家庭・保育所・幼稚園と記されているのに気付かれた方があるだろうか。倉橋惣三先生は、このことにとくに注意を喚起され、「幼児の教育」は、幼稚園の中の教育だけのことではないことを強調された。家庭にも、保育所にも、幼稚園にも共通のこととして、幼児を保育するという、人間の生活に欠くことのできない営みがある。それが幼児の教育で扱う根本課題である。このことは、むかしもいまも変わらないことであつて、子どもは、幼児期におとなから心をかけて保育されることがなければ、人間となることができないであらう。

幼稚園の中だけにしか通用しない幼児教育ではなく、人間にとってあたりまえの日常的な保育をしっかりと確保することが、現代の大きな問題である。

その第二は、この雑誌は、新しい学問研究を学ぶことを課題としていふことである。倉橋惣三の言をかりて云うならば、新なるものは、真を求めるものである故に貴いのである。すなわち、幼児教育を根本的に問うてゆくことが、常に新しい学問を学ぶ者の態度である。この雑誌が外国の動向にも注意を払ってきたのは、このような観点からである。

幼稚園教育も、児童研究も、百年の歴史をへた。いまや、児童研究・保育研究が、たんに教育効果をあげるための研究にとどまることなく、人間の文化に貢献するものとなりうるか否かという課題を負っているのであると思う。

その第三は、この雑誌は、創刊の時から、遊びを重視する新教育の伝統の上に立っていることである。発刊のとき、すでに日本の幼稚園の開設後、四半世紀を経ており、それまでの形式化した保育の批判に立って、幼稚園に新しい教育を導入することをこの雑誌の使命としていた。大正から昭和にかけて、米国の新教育論と相まって、倉橋惣三の誘導保育論により、幼稚園を幼児の遊びの場とすることの主張がこの雑誌を通してなされた。

幼児の生活の中心は遊びであることは、教育理論によらずとも、私共の体験から明らかである。しかるに、現代の幼稚園、保育所、家庭では、遊びを育てる保育を実践するのが困難な状況にある。そういう中で、この雑誌は、遊びの保育を実践する人々の支えになることができたと願っている。

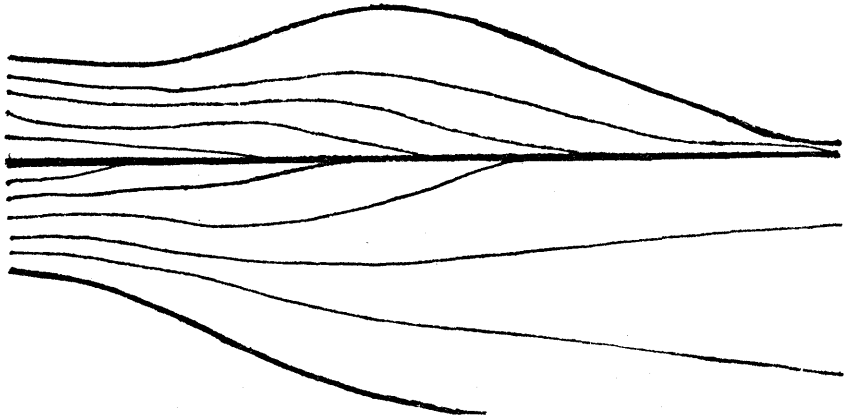
この四半世紀は、社会・経済のみならず、幼児教育にとっても、激しい変化の時代であった。昭和二十五年に、幼稚園数二、一〇〇、保育所数一、〇〇〇であったが、昭和五十一年には、幼稚園数一三、四九二、保育所数一二、〇一七となり、八・二倍に増大している。幼稚園の就園率からみれば、昭和二十五年には約一〇パーセントであったが、昭和五十一年には六四・六パーセント

であり、保育所もふくめればほとんど百パーセントである。このような急激な膨張は、幼児教育がその根本問題を問う暇なく、現実の要求に追われたことを示唆するものであると思う。

この間の学問の面の変動も激しかった。一九五〇年代のはじめには、米国の幼児教育界は、それまでの新教育の原理によっていたが、一九六〇年には、知的早期教育論が激しいいきおいでこれに代っていた。それからの二十五年間、教えきれないほどの幼児教育プログラムが提出された。この雑誌が通り抜けてきた最近の四半世紀は、このような激動の時期であった。その激動はまだつづいている。この中であって、幼児の生活にふさわしい幼児教育をつくり出してきたのは、幼児と共に毎日の保育を積み重ねてきた実践者たちである。その大地に根ざした保育を、実践と理論と共に進めてゆくことは、私共のこれからの課題である。これまでこの雑誌が追求してきたことを、変化する情勢の中で追求しつづけるのは、困難なことであるけれども、今後、この同じ歩みを、希望をもって、つづけてゆきたい。

創刊八十周年記念

連載インタビュー



児玉省

〈聞き手〉 大戸美也子

児玉 いじめないでね、アハハ……

大戸 先生はお生れは一八九六年？

児玉 そうです。

大戸 十九世紀の方ですね。

児玉 アハ……。今八十三。今年八十四になるよ。

大戸 千八百年代ですか……何か年表見ないとピンとこない(笑)。一八九六年……

児玉 ピアジェは僕と同じだよ。あの人が偉

いよ。

大戸 (年表を見ながら) そ、ピアジェ生れる。

デュロイが実験学校を作った年ですね。

児玉 そうです、その年です。あなた、いろんな

こと調べてるね！

大戸 はい、あの、一生懸命調べてます(笑)。先

生、このお話し合いは『幼児の教育』に載るそうで

すけれど、『幼児の教育』が誕生したのは一九〇一

年ですから、先生の方が五つお兄さんです(笑)。で

すからお兄さんの立場でこの八十年間を振り返っ

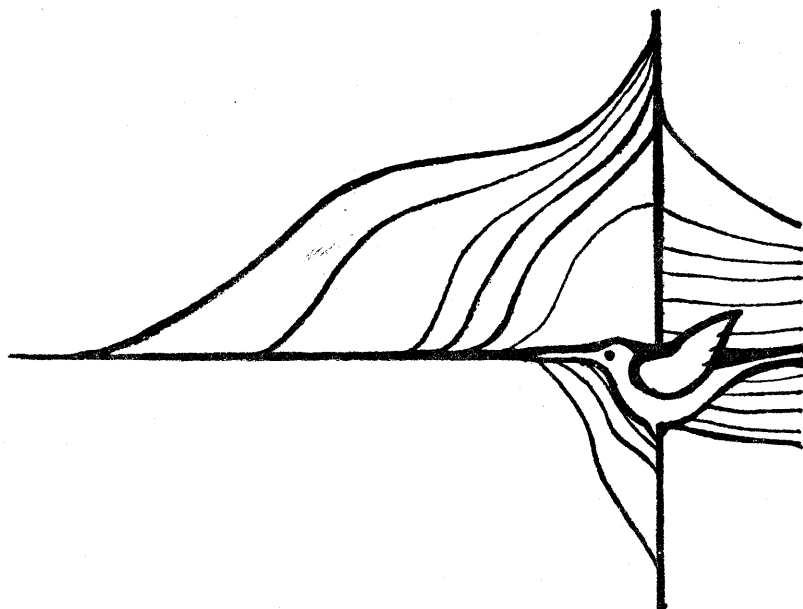
て、いろいろなことを教えていただきたいと思っ

ます。あの、『幼児の教育』と児玉先生っていうの

は大変になにか、重なっている所があるように思う

のです。『幼児の教育』はもともと子どものしつけ

方とか性格形成の問題などを通して当時の新しい研



児童研究と保育 〈1〉

究を紹介すると共に、親を啓蒙するというようなことを目指して始まったと思うのですけれども、先生の人生もまた、子どもの人格形成とかそれにかかわるしつげに、今までの研究のほとんどを献げてきていらっしやいます。しかも、それを非常に科学的な方法で研究しながら、一方ではそれを教育界に応用するということで御活躍なさって、何か先生御自身が『幼児の教育』の内容それ自体と申し上げてもよいように思われます。そういう意味で、先生の前までのお仕事を振り返っていただくと、我が国の幼児教育の中身の変遷と対応してくるのではないかと思ひまして、今日の対談を大変楽しみにしてまいりました。

児玉 あかね、私がね、幼児教育に具体的に関係するようになったのは、日本女子大学が——あそこはもと専門学校だったね——初めて女子大学になった時からだよ。たぶん昭和二十四年だったと思うがね。その時に児童学科ができたんです。その前に非常勤講師として勤めていて、子どものことに関係のある学科に関係していたこともあって、女子大学に児童学科をつくることに関係したのは僕なんだよ。そして当時のGHQ（占領軍司令部）の指導官はこれに力を貸してくれたが、その指導官は、児童学科

は家政学部の一つだといって試案を示した。またカリキュラムの原案みたいなものを寄こしたので、それと僕が考えたのと混ぜ合せてつくったのが、最初の児童学科カリキュラムであった。そこから新制大学の児童学科がスタートしたわけ。

シカゴ時代

—— デウイイとミード ——

大戸 戦後の幼児教育の研究拠点である児童学科を創設され、その中にアメリカの意向とか、シカゴで勉強されたことが、その時、生きてきたというお話ですが、そのルーツを探るためにも、シカゴ時代のお話から伺いたいのですが……。いつ頃、いらっしやいましたか。

児玉 二十一年。一九二二年(大正十年)からね。僕がアメリカに勉強に行くようになった動機はというとね、僕は当時、大阪毎日新聞につとめていたが、新聞の仕事は好きであったが、どうしても仕事に満足できなかつた。というのは、僕は、知らないことを知ったように書いたので、これがど

うも耐えられなかつた。当時の哲学ブームの影響はあつたにちがいないが、もつと根本的な勉強をしたいと思つたね。これが僕が新聞社をやめ、哲学の勉強を始めるようになった動機、そしてアメリカで勉強しようと思つた動機だよ。

そうして、卒業したのが二十五年ね。そして、大学院に二年おつた。その時最初、僕は哲学を専攻していたが、デウイイの哲学に触れてね。偉いと思つたな。

大戸 直接お習ひに？

児玉 いや直接じゃない。もうデウイイはコロンビアに行つて、いませんでしたよ。とにかくあの時、デウイイを読んだ時の感激は忘れられない。それほど感激しました。一つはね『実験論理学論文集』という本で、それはね、デウイイの論理学のおそらく基本だろうね。それから引き続き『Democracy and Education』。その二つで僕はすっかり考え方を変えられましたよ。それがね、ずーっと続いてきちやつてね、デウイイの主な著書は全部読みました。そして今に至るまで、デウイイの考えは、こ



氏こやみとおお

れは僕を支配したと思つている。

大戸 あの、先生は一九二一年から二十七年までアメリカにいらつしやつて、ちょうど一九二〇年代のほとんどをアメリカで過ごされたわけですね。その当時のアメリカをちよつとみてみますと、教育の方では随分いろんな実験、いわゆる Progressive Education の組織ができて、ダルトン・ブランドのコンダクト・カリキュラムなど、次から次にいろいろのプログラムがアメリカの各地に発酵していた時代ですね。そこへもつてきて、今度は一九二三年にはロックフェラー・メモリアル財団から多額のお



こだま はぶく氏

金が寄附されて、あちこちに児童研究所ができて新しい研究が競うように開花した、という児童の教育と研究のまさに黄金時代にアメリカにいらして勉強なさって、私も本当にうらやましいのですけれど。

児玉 いやあ、それがね、それはその通りだがね、シカゴで勉強している時は、よそ見はせんかったからね。そしてね。大学ではね、いじめられるばかりだもんね。また本当に勉強したよ、僕は。ヘーゲルの『論理学』を勉強した時はね、三か月間新

聞も読まなかったし、一切他の本も読まなかったね。たった一つのコースをとっただけだよ。それ位『論理学』に没頭したよ。そして昼も夜も大学の図書館に通ってましたよ。そんな余裕はなかった。

大戸 それでは先生、目をつぶってらした時代かもしれません。当時のことを思い出していただけるかと思って、先生の時代の本、幾つか持ってまいりました。一九二四年発行の、これは“Childhood Education” 創刊の年の本ですね。それからこれが“Progressive Education”の創刊号。

児玉 ありゃそうかね。あんたの方がよう知っとるぞ、こりゃ。

大戸 それから先生、とてもおもしろいものがあるんですよ。一九二四年から五年のシカゴ大学附属のエレメンタリースクールの便覧です。シカゴはキンダーガルテンと小学校の、今でいう幼小一貫制に大変関心を持って、随分実験的なことをやっていたらしいですね。

児玉 そうです。とにかくデウイイのラポラトリー・スクールは、デウイイはもう

いなくなっていたが、その精神は残っていたからね。そしてデウイイの、要するにプラグマティズムの思想が支配していたから、その影響はありますよ。結局はシカゴスクールという学派は、哲学だけじゃなく、心理学からはじまって、ポリテイカル・サイエンス、エコノミー、ソシオロジー、その他社会科学全部にわたって、それがシカゴの全学園に浸透していたんだ。すさまじい時代でしたよ。だからね、哲学の先生はね、全部プラグマチスト。偉い人達がいきましたよ。そこにミードがいた。ジョージ・ハーバート・ミードね。これは偉くってね。僕はこの人から一生を支配する影響を受けた。

大戸 どういう面で影響を受けられましたか？

ミードの自我形成論

児玉 ミードの思想は非常に多角的でまた難しいが、デウイイとともに僕を一生支配した哲学者、社会心理学者なので、少し面倒でも説明させてもらおう。彼は一九三

一年に亡くなったが、亡くなってから彼の評価は高まる一方で、今はもうアメリカだけでなく、世界各国で彼の思想の信奉者がでている。彼の思想は非常に広汎にわたるが、その中心的題目の一つは、自我の形成理論だろうね。辛抱してもらいます。次の引用は彼の著書のあちこちから縮少して引用してある。「個人に対してその自我の統一を与えるのは、組織された社会または社会集団であって、——この社会集団を一般化された他者 (Generalized other) と呼ぶ

——この一般化された他者の態度こそ全地域社会の態度である。……社会が個人の行動に影響を与えるのは、この一般化した他者の形である。……そして個人が一般的他者が、自分に対して示す態度をとることによつてのみ、個人と他者の間に共通の話題の世界が存在するのである。自我が発生する過程は、グループにおける個人間の相互関係、すなわちグループが、前もって存在することを前提としている。……個人は、自分が他者の立場をとり、他人が、自分に、対して行動するであらうように、自分に、対

して、行動する限りにおいて、自我が成立するのである。……子どもは絶えず、彼の周囲の社会の態度をとっていくのであって、それで初めて組織全体の中において機能し得るものとなるのである。それは子どもも社会の自意識の一員として形成していくのであって、こうして子どものパースナリティができてくるのである」

もとお茶の水大学の松村(康平)さんのサイコドラマの理論、すなわちロールプレイング理論、このミードの考えに基づいたものです。その他多角的ないろいろな考え、彼、偉かったな。その後何十年、僕の日常思考は陰に陽に、彼の考えに導かれてきた。結局僕は、哲学専門の道を進まなかったが、心理学やその他の理論はいつもミードの理論におんぶしていたようなものだ。あの幅の広い、深い思考は、ミード先生の顔つきとともに想い出されるよ。ミード先生は偉い人でしたよ。シカゴ学派のその他の立場は、思考、すなわち精神現象の生物学的発生と社会学的発生をとり、また、真理の実験的証明の上に立つてのみ、その証

明された範囲内においてのみ、その妥当性を認めることであった。

大戸 そうしますと、一番最初は論理学というのが、プラグマティズムとか、ミードの洗礼を受けて、論理がどのように形成されていくかという方向、内的なものの形成過程へ関心が移っていらして、大学院からは心理学へ移られたわけですね。

児玉 そうです。大学でもね、心理学を相当やったけど、それは哲学を援護射撃するための心理学であつたわけ。ところがやってみると、これはどうも、思考も人生哲学も、思弁的なものだけでは解決できないと感じてきたんだね。これはどうしても科学でやらなければならない。人間の精神を考えるためには、科学的にやること。そのためには心理学だと思つた。で、大学院ではもっぱら心理学をやつたよ。

大戸 心理学といつても随分幅が広いですけれど、性格形成ですとか、しつけの問題に関心をもたれたのは、やはりミードらの人との交わりの影響の……

兎玉 シカゴ大学の心理学プロパーって
いうのはね、その中心はネズミでしたよ。

これには世界的に有名なカー(Conner)って人がいてね。これも偉い人でね。鋭い頭の持主でね。で、僕もネズミを使って動物実験やったよ。毎晩八時に実験室に行つて一時間ずつ、ネズミを迷路で走らせながら実験したよ。人間ではできないことを、動物を使って検討しようということで、比較心理学の考え方だよ。シカゴにはまだ、いわゆる児童心理学プロパーはなかったな。しかしプラグマチズム哲学の立場からすれば、発生発達の人間行動を考えなければいけないというのが、その主張だがね。そこで、この点については満たされないが、刺戟を感じたままでシカゴは終わった。当時は教育心理学ではジャッドやフリーマンなどがいたが、児童を専門的にやる心理学者はいなかったんだ。

ば、人間実体の把握はできないだろうと思つたわけだ。当時シカゴには有名な生理学者、神経学者が何人もいたが、たまたまエール大学からきていたエンジャーという人の生理心理学の講義をきいた。これまた啓発されて、感心しちゃつた。僕はね、何でも感心するからね(笑)。エンジャーという人は、いろいろ教えてくれた。特にシエリントンの神経系統の研究、エドリアンの研究、ラッシュレイの猿の脳の解剖の研究など面白かつたね。要するに僕としては頭の働きをいかにして生理学に結びつけようかと一心になつた。で、心理学の学習の法則——主として連合作用——を生理学に結びつけてみようと思つた。で、幼稚な仕事ながら、そういうことを踏まえて、「連合作用の生理学的基礎」という論文を出したところが、おもしろいといつて最高点くれたよ。(この論文は日本心理学会第一回大会の時に発表した)僕は哲学を出て、大学院では心理学に入っているだろう。で、精神活動を、簡単に言えば行動を、一つにはミード先生の社会心理学、もう一つは生理

心理学の両面から攻めようと思つたんだ。それから、ラッシュレイの猿の脳の解剖の研究——すばらしい研究——も聞いたな。ラッシュレイという人は、いかにも書生っぽらしくて、ゆかいな人であつた。

大戸 なるほど、でもおもしろいですね。シカゴつて、もともとワトソンがでたところですね。ですから、うっかり比較心理学へ行つたらワトソンのようになつてしまうのが、ミードで歯止めになつて。

兎玉 そうなんだよ。ワトソンはミード先生の弟子だよ。ところが僕に心理学を教えたカールつて先生はね。ワトソンをびしびし批評するんだよ。そりゃあもう、おもしろかつたね。カールつて人は頭が良かったから。鋭い理論的な批評でしたよ。

大戸 ワトソンが本を出したのが一九一九年ですが、第一次大戦後 "Back to Action" で、そういうアメリカイズムをワトソンが極端な行動主義を唱えることで代弁して、まさにその本が出た頃に先生は勉強してらしたので、もう白熱の論議が展開したのでしょね。

児玉 僕らはカールの影響を受けたけれども、カールは決してチイチエナーなど昔の心理学者じゃなくて、きわめて穩健なビヘイビリストだった。今じゃ皆ビヘイビリストだがね。その影響を僕は受けたんだよね。そしてまあ、何かしらん、手探りばかりして帰って来たんですよ。

帰国して……

大戸 昭和三年に日本に帰ってらして、最初にとどういう所にお勤めになったのですか。

児玉 心理学で雇ってもらおうと思ったけれど雇ってくれないんだよ。というのは当時日本の大学には心理学の先生一人あればよかったんだ、どこでも。

大戸 講座が一つってことですか。

児玉 講座もくそもないよ。一人しかいないんだよ。だから僕、どこへ行っても雇ってくれないんだ。それから慶応で頼んだらね、英語の教師ならあるっていうんで行った。それから日本女子大に行ったが、女子大で僕が実際に心理学などを教えるよう

になったのは、帰国後八年か十年位してからだね。当時女子大におられた松本亦太郎先生が病気になるまで、その後釜っていうことで入れてもらったわけ。女子大の児童研究所は一九二七年にできているが、正式に関係するようになったのは一九四八（昭和二十三）年に専任になってからで主事を十五年つとめたよ。それまでは波多野（完治）さん、松本（金寿）さん、そして島山さん（後の波多野夫人）などが出入りしていたよ。それから児童研究所では、毎年何年間か六百人数の子どもの相談を受けたね。あの当時の相談熱はすさまじいもので、僕も随分悩まされた。

大戸 先生が日本に帰ってこられた昭和四、五年頃っていうのは、日本の幼児教育界が倉橋先生を中心として新しい教育ブーム、ちょうど先生がアメリカで体験なさったことが、日本においても、小さいながらも一つブームを作っていたと思うのですけれど、そういうことは女子大の方までひびいていなかったのでしょうか。その辺、どう観察されていらっしやったのかお聞か

せ下さい。

児玉 日本女子大の豊明幼稚園には、山崎（？）先生とかいう方がいらして一家を成していたと思う。しかし特に進歩的であったとは思わなかった。僕は援助はしたが、それ以上のことはしなかった。これは豊明の伝統でもあったようだ。大学の先生が行って、幼稚園の先生を牛耳っちゃいかんよ。僕もやらなかった。女子大は進んでいる方だったがね、それでもね、見ておると、僕の考えと違うようだったね。

大戸 先生はプログレシズムそのものをアメリカで体験なさって、それと対応するようなものができてきて、違うって感じられたってことは大変興味深いんですが。先生の二、三年前に倉橋先生がアメリカに遊学しまして、あちこち短期間ずつまわっていらっしやいました。それで帰ってらしてから『幼児の教育』に見聞録などを載せていらしたのですが、そんなものをお読みになる機会はございましたか。

児玉 読まなかった。一生懸命自分の考えたものだけ勉強して、倉橋先生のは

あんまり見なかった。ただし、倉橋さんの誘導理論、あれは偉いです。

大戸 先生がアメリカで経験なさった教育と、またデュイイの教えなどと、呼応するようなものがありましたでしょうか。

児玉 その通りです。誘導理論はデュイイの教えと同じようなものだ。ただし、日本の装いがしてあった。

大戸 どんなどころに日本的な装いを感じられましたか？

児玉 考え方から表現からすべて。僕に言わせると、あれはデュイイに日本的着物を着せたと考えていい。ただし、僕ね、余り現場を知らんし、実際問題として理論だつてまだ確立してるわけじゃなかったので、勉強しなくちゃならんと思つたわけだよ。それからね、まっしぐらに勉強に取り組んだ。そこでね、僕はフレーベル読んだよ。原典読んだよ。それから、モンテッソリーからピアジェといったぐあいに。また有名な進歩主義の教育書全部読んだよ。

大戸 ピアジェは英訳で読まれたのですか。

児玉 ええ大体英訳です。フランス語は時間がかかって。僕は最初、ピアジェにあき足らんで批評していました。それは今も変わらんよ。ピアジェのあの、いわゆる子どもの自己中心性の研究ね、ありや、あのままでは頂けない。

大戸 どういう点で？

児玉 第一に自己中心性項目の分類がおかしいよ。第二に定義がおかしいよ。定義的にいうと、独語ひとごはイメージだが、対象をおいてしゃべっている社会性言語であつて、そういう意味で社会性のない言語はない。これはミード先生の教えから考えている。また、集録した言語は、整理の方法によつてかなり結果が違ふこと、またそれよりも、対象を違えたと結果が違つてくることを僕は見出した。一九一五年、二度目にアメリカに行った時、ミネソタ大学の児童研究所で、アンダソン所長の求めで、大学院の学生と先生方に僕の研究を講演（一寸言葉が大きい）したら、当時のアメリカ人は僕の話にうなずいてくれたんだよ。ピアジェは当時は十分に感心しなかつたよ。

ところがその後、研究がどんどんできて、読んでいくうちに偉さが分つてきた。

大戸 ピアジェ自身も随分こう柔軟な方です。批判を取り入れてまた変つてきていますから。

児玉 ピアジェは偉いですよ。偉いけれども、あの時のピアジェはいけなれないと思つた。

大戸 そうですか。では戦前はそういう風に横目で幼児教育を見ながら、一生懸命勉強なさつて、そして戦後二十四年、児童学科を作ると同時に非常に大規模な研究を始められ、教育にもだんだんに関心を持たれて、今や幼児教育の方にすっかり入つていらしたわけですね。

児童研究

—— 感情と社会性と ——

大戸 女子大の研究所では様々な研究をなさいましたが、特に戦後すぐには、じめられたしつけの研究は、全国を歩いて調査された大規模なご研究でした。そこで今度は、性格形成やしつけの問題に移らせてい

たきますけれど、現在の研究は昭和二十年代の研究と変わってきておられますか。

児玉 変わってきています。しつげの研究は全国各地四十二か所を廻って、子どもと母親六十組以上の家庭を調べたが、それが終ってから、また一部分はそれと平行して、子どもの臨床問題に入って幼児から児童の問題行動の研究にかかった。加州大学のホンチク、アレン、マクファレンのガイダンス・スタディにヒントを得て、問題行動項目を作成し、小児科の先生方と心理の人たち十名ばかりの協力で、後十年近くもかかってある程度幼児の資料に基づいて問題行動の因子分析を行なった。こういう研究は日本ではあまり行なわれていなかったもので、多少悦に入っていたわけだが、どうも人が余り使ってくれてるようでない。まだ未解決の点が沢山あるが、多少は自信がある研究だよ。

その他時々の研究は数多いが、これらを別にして、ここ数年間に取り組んでいる研究が三つある。大体は昔の教え子の人たちと一緒にやっている。一つは幼児の社会性

の研究で、今までの幾つかの外国の研究を参照して独自の項目を作成し、家庭（母親による）と施設で観察したことを記入した結果を検討している。もう二年位かかるんじゃないかな。結果は学会にずっと出してありますかね。社会性の発達は、家庭と施設の両方を考えなければならぬ。施設としては、僕が三か年間園長をしていたメゾ

ン・ド・クール園を使い、家庭で親が観察した子どもと現場でみる子どもの社会性の発達差を見ようとしたわけですよ。普通の社会性の研究は、どこともなしに、家庭と施設での姿の複合写真みたいなものであるが、これには無理がありますよ。社会性の表現も形式も、場面により対象によって違いますからね。それを合わせて考えなければならぬ。はじめから一つみたいに取り扱えるのは適当でないよ。やってみれば分るよ。もう一つの研究、それは体育関係の人たち七、八名と、幼児の運動能力の発達の研究をしているよ。運動が幼児の社会性発達にも、知的発達にも関連があると思うし、また今の幼児の運動能力が落ちていること

も確かなようである。この研究に四年かかった。幼児の運動能力に基準がつけられるかどうか分らないが、一応早い方、おくられている方くらいは差は見出せるでしょう。もう一年位でまともになりそうだ。

大戸 人間の性格は、それ自体、複合的要素から成り立っている外に、一つの要素をとりあげても、子どもの生活場面の特性によって異なる影響を受けて発達していくということですね。先生の研究はどれも規模が大きいですね。

児玉 だから、実はね。すこし広すぎて困っている(笑)。それともう一つ、感情の研究しているよ。感情の研究はおもしろいぜ。

大戸 あのブリッジエスの研究とはまた違うのですか。

児玉 あんなのはダメですよ。しかしあれしか書いてないよ、人は。

大戸 そうなんです。情緒のことはさんざん言われている割には、一九三〇年代とか二〇年代の研究をスルッと今、持ってきていますよね。

児玉 みんなあれだけ書いてるよ。

大戸 あれとどこが違うのですか？

児玉 あれはね、第一ね、あんなに幼児の早い時期から感情を分けられやしないよ。例えば二歳までに相当分かれるということを書いてる。あんなことありえないよ。幼児にね、あんなソフィスティケートされた感情はあるはずないよ。そういうことと無視してるよ。

大戸 もっとカオスっていうか、混沌としたところがある。そういうことでしょうか。

児玉 僕は感情っていうものはね、子どもにおいて、最初からすっきりした単独的なものはないってこと感じるんだ。子どもの感情ってものはね、怒りや悲しみや全部一緒だよ。単独の感情は頭の産物であって、そんなものはないんじゃないですか。

大戸 子どもにじかに触れて、子どもから出てきたデータからもう一度見直す、研究の観点を子どもの方に移すところに、先生の何というか、延々と研究を続けるという起動点があるみたいですね。

児玉 そうです。だから今、感情と社会性と二本立でやってるの。それによって子どもの性格像をとらえようとしている。

大戸 性格に関してもう一つ重要なことは、コンティニューティィとディスコンティニューティィの問題、連続と断絶という問題についても先生はお考えを深めていらっしゃると思います。ただ、先生の立場は、幼児教育で性格形成を重視する前提として、よく一般に云われる「三つ子の魂百まで」式の発想——発達の連続性の方を一方的に強調する立場ではないと思うんですね。先生のご本を読みますと、幼児期の生活というのは、むしろ不安定で変わりやすいんだと。幼児期はうつろい易いけれど、性格形成にとって大切な時期でもあるという、この微妙な関係を幼児教育者にわかってほしいのです。いつまでも、ナイーブに「三つ子の魂百まで」なんていつてないで。

児玉 というのは、性格っていうものは、その子どもの大雑把な行動の方向を示すものであって、それこそある意味からいうと、教育の重要目標だよ。その方向は、何もわれわれがこう行けということではなければ、もう一つ大切でもありえないよね。それからもう一つ大切なことは、特性がどこまで続くかわからんけれども、続かないということはありえないんだよ。人間が同じである以上続くんであるうと。ただし、どう続くかというのが問題だよ。流れの方向は違っても続いているんだよ。その見通しを持つことは幼児教育の大事な仕事だろうね。それで、今欠けている知識はそれだよ。今後、十年後にどうなるかっていうの。そのためにはどうしたって、いわゆるロンディチュディナル・スタディ（縦断研究）になつてくる。日本にはこれがないよ。

大戸 それにもかかわらず、一時期、幼児期はクルーシャル・イヤァ、決定的な時期といわれて、それがために幼児教育が大変ブームになったことがあるのですけれども、最近そのブームも少し下火になって、クルーシャルではなくて、レティブリーにセンシィティブな時代、比較的相対的に

敏感な時代という風に少しずつ落ちついてきました。また、すべてに対して敏感なものじゃなくて、ある時期は性格のある側面、例えば言語獲得の上で非常に敏感であるとか、ある時は社会性に対して非常に敏感という風に落ちついてきたのですけれど、そういう見方は先生、どういう風にお考えになりますか？

児玉 その通り。あのクルーシャルって言葉は恐しいよ。日本人が好きなんだね。特にね、神経学者が好きらしいね。頭はどの時分に発達するとかね。大体の傾向は別として、全部こまかく当てはまるかどうか。違った例があるのをどう説明するかというんだよ僕は。

保育のなかで……

児玉 そこで最後に、僕の言いたいことの最後だが、それじゃね、幼稚園教育というものは何も介入して与えないでやれるか、ということをやってみた。僕は実際実験したんだよ。これは二十人か十五人のクラスでね、先生五人つけてやったんで

す。子どもは全部自由にしてあって、うんと遊具を与えた。そして先生は全然手をつけなかったね。で、新しい子どもが来た時でもね、ほっとくんだよ。例えば初めて入った子どもってのはね、ポーツとしてますね。けれどもね、見ているうちに他の子どもの遊びに魅かれちゃって、一步一步近づいて入っていく。そうするとほかの子どもは受け入れる。幼稚園の模範児童っていうのは教科書的に言えば、「さあ来て入り給え」って言うんだが、そんなこと言いやしないよ。子どもっていうのはただ知らんふりしているよ。ところがね、だんだん入って来るんだよ、一人で。そうすると子どもが連れていっちゃう。この過程見ておって、こりゃ、そういうことも介入しないでいいと僕は思った。介入してもいいが、しなくてもいい。ところがだね、子どもたちがやっていたことを、全部どういうことをしているか分析してみたよ。来てから帰るまでやっていることを記録して、分析したらね、そこにはね、何もかもありますよ。いわゆる六領域、大部分ありますよ。六領

域なんて、別々にやる必要がある。ただ何が少ないかがわかった。自然がないよ、それから音楽がないよ。

大戸 子どもの自由な行動をずっと見て、それを項目をたてて切ってみたわけですね。

児玉 そうです。全部記録したものを分析したんです。

大戸 なるほど。自発的活動を尊重する保育をしている幼稚園だと、今の先生の研究は大変助けになると思いますね。そうすると、大人が介入する場所をいくつか除けば、あとは子どもが自前でやりだすということですか。

児玉 そうです。自前です。うちではけんかも介入しません。それともう一つ言いたいことはね、子どもは駆けるだけではないということ。ていうのはね、静かな時間がなくちゃ身につかないものがあるよ。

大戸 なるほど。

児玉 モンテッソリーの「沈黙の授業」っていう言葉は、あれはやり方は僕は感心

しませんけどね、必要だよ。NHKの幼児向番組のワッワーっていうあれね、あれだけではだめだよ。ところがね、子どもはもつと静かな瞬間に学ぶものがあるんだよ。忘れちゃいけないと思うんだ。そうしなけりゃ子どもの情操は育ちません。

大戸 非常に大切な面ですね。保育の現場ではつい、にぎやかな活動に生き生きとした子どもの成長をとらえがちで、今おっしゃったように、静かで一人ぼっちでいても内的世界で生き生きとしている姿がなかなか見えてきません。子どもを見ていると、ポケーンとしていいる時があるんですね。その時はわからないんですけど、後で見ると、それが次の活動の足場になっていることがあるんです。

児玉 それです、それです。それを言うんだよ。それが大切であってね、そういうことをわざわざ奪うことを幼稚園の指導と考えているが、そうじゃないの。

大戸 そうですね。先生のお話を伺っていますと、人間はいろんな面があること、いろんな形で成長していくこと——大人が

介入する場所、介入しない方がいい所があること……幼児教育が本当に複雑な人間の成長を見続けていくという巨大な仕事であることがよくわかります。先生は、八十年かかって、この巨大な仕事を悪戦苦闘してやっていらっしゃるわけですね。

児玉 やあ、八十年にしちゃ、仕事の時間が足らんがね、そういうことを感じますね。

大戸 お話伺っているとあんまり幅広くてつきないのですが、そろそろ終りに致しましょう。

先生は人格を、それも非常に幅広くとらえて、そしてその変化もとらえて、しかもその変化を促す諸条件にまで目を配って、そういう心理学の側面が好きだっておっしゃっておられます。これは幼児教育をする者にとって大変有難い角度だと、かねがね尊敬して参りましたが、今日その問題意識のオリジンから伺うことができました。先生の広汎なお仕事は、もっと教育界に還元できると良いのですけれど、今まで先生は沢山本をお書きになることをなさら

ないで、研究ばかり続けていらしたものですから……

児玉 僕はね、本は書けなかった。というのね、書こうと思ってもね、あやふやで書けなかったよね。

大戸 本心に良心的に研究していらっしゃると、本当のところ、わからないっていう所まで行っちゃるんでしょ。わかるためにやって、結局またも一つわからない世界に突入していくわけで。そんな風にしていらしたものですから、オープン・エンドで、本当に開かれて、まだ研究をお続けになると思うのですが、今までの中にも、環境の重要さとか、子どもの自発活動がいかに子どもの多面的な発達を自ら作り出すかとか、それから社会性っていうものが、場面場面で非常に違っていて、しかも子どもの成長によって、場面の意味が同一場面でも違ってくるとか。それから感情の発達の経路にしても、あんな風に割り切れるものでなくて、もつとごたついたカオスのような、その中同じ悲しみと喜びが背中合せになっているような、そういうようなこ

とを研究の中ではつきり擱んでらして、それを幼児教育の中で皆が消化していかなければならないことだと思ふんですね。

それと、こうして八十年間、まだ第一線ですよ。そしてまた新しく八十年に向けて、児玉研究所までできていらっしゃるそうで、その原動力っていうのは何んで、生きた子どもをしっかりと見て、そして見ながら発見して、自分のデータの方を作り変えていく。その謙虚さが、生涯にわたって研究を推し進めるエネルギーになっているような気がして、私、大変感銘を受けました。

児玉 そりゃね。しかし要するに、広げすぎてましまらんという姿だよ。本当はもう少しまとめて、本を出してくると良かったであろうけれど、ましまらんから書かなかったからして、一層まとまらんかった。

大戸 随分示唆的なお話ですね。今まで多くの人が急いでまとめたから、幼児期がちんまりとまとまりすぎてしまった。本を書くとなると、ある程度輪郭を作らなくてははいけないし、そして最後には何

かよい方法みたいなものを提示しなければいけないようなサービスピ精神が働きますから。そういうような本があります。ところが幼児期は、先生がこうして長い間真剣に取り組んでいらしても、とても手におえない位複雑で大きな存在であることをお示し戴いて、八十年代に向けて大きな宿題を与えて下さったような気がいたします。

最後に、八十余年をふりかえられて、どのような感想をおもちでしょうか。何しろ、私の年齢の倍以上の長さで、見当がつかないのですけど。

児玉 とにかくね、学問は進んだ。保育は、進んだかどうかからのだがね、批評とかね、理論づけだけは進んだけれど、保育自体が良くなったかどうかはわからん。も一つ気になるのは、幼稚園や保育所に理論がなくて、エリート教育の風潮に流されているみたいなのが多いこと。これではいい保育はできないな。もっと子どものほんとの幸福と発達を考えなければね。保育が昔に比べてよくなっていない、など放言(?)したが、これについてはもう

少し追加して説明する必要があるな。保育を構成しているのは、環境と施設・設備、それに保育者と児童である。施設・設備はよくなったし、保育者養成教育もよくなった。保育に関する研究もどんどん出ておる。それなのになぜ保育が進んでいないというんだと詰問されるだろうな。しかし僕

はこう思うんだよ。設備や保育者養成がよくなることと、保育がよくなることとは別ですよ。保育の目的については、幼稚園では「幼児の心身の調和的発達をはかり、健全な身心の基礎を養うようにすること」とある。保育所も大同小異で、恐らくだが考えても余りこれと変わることはあるまい。そこで第一に保育の理論の問題がある。心身の調和的発達を目標としながら、この原則はしばしば無視せられている。いま都会の——都会だけでは——幼稚園では子どもに対してワークブックで漢字や算数教育が行なわれているんじゃないかな。これでは小学教育の下請けです。子どもが自由にはつらつとして遊戯を楽しむ時間、運動能力と体力を養う時

間、友だちと一緒に争い、協力と社会性と情緒を養う時間が犠牲になっているんじゃないかな。また、沢山の幼稚園では先生が指導しすぎて、子どもの個性、自発性、創造性を伸ばす機会を奪っているみたい。またカリキュラムだけ整備して、子どものニードや自発的な発達を忘れてるんじゃないかな。ピアジェはこの点にふれて、「教師は児童に関心を持つよりも、教えることに関心を持っている」と述べているよ。僕も大いに賛成だな。それなのに、ピアジェの名で大変な主知的教育をしている幼稚園がある。ピアジェをなんと読んでいるのだろう。全然ピアジェを知らないよ。僕も誰にも劣らず、幼児の知性が伸びることを願いますよ。しかし今の多くの園では、保育理論を無視してしまって、その方法論を勝手に操作しているね。フレール——理論面では——、デウイイ、ピアジェらは、みんな保育について進むべき同じ方向を示していると思うがな。注入して教えこむことは、子どもに表面的な知識を与えるが、子どもが自分で活動し、自分

で努力し、自分で考える力を与えないことである。ピアジェのいう「真の学習は、子どもが自分で活動することからくる」ということを忘れてるよ。性格・社会性・情操の函養についても同じことが言えるな。ただ、これらの幼稚園とは別に、少数ではあるが非常にいい幼稚園ができていては忘れてはいけない。ただ数が少ない。六領域は保育における問題点を指摘して、気づかせるにはいいが、あまりこだわりすぎると、カリキュラムの柔軟性、保育の柔軟性を失なわせて危険だな。僕の批判は大多数の幼稚園についてです。

僕はまだまだ研究します。『幼児の教育』も八十周年だけではなくて、もっともっと御発展を祈ります。

〔記録・国吉栄〕

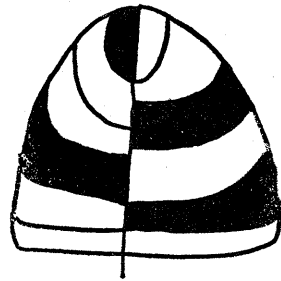
児玉先生は日本女子大学停年後、東京の成徳大学、そして現在は小田原女子短大に勤めていらっしゃる、第一線で活躍中です。

次に児玉先生の長年にわたる御研究から、児童研究と保育に関するものを掲げます。

- 1 『子どもの心理としつけ』 共著 (主婦の友社) 昭和21年
- 2 『児童心理学』 (日本女子大通信教育部) 昭和25年9月
- 3 『青年心理学』 (日本女子大通信) 昭和27年6月
- 4 『保育理論』 (日本女子大通信) 昭和28年2月 (フレール・デウイイ・モンテッソリイ・ハロルド・アンダソン等の理論を取り上げた)
- 5 『子どものしつけと性格』 (フレール館) 昭和44年(しつけの研究を一括し取り上げた)
- 6 『本邦の幼児の精神発達の研究』 共著 (フレール館) 昭和44年 (日本の幼児の社会性の発達の研究がある)
- 7 『保育原理』 共著 (東京書籍) 昭和49年著者の保育効果評価法を提案、ピアジェの精神発達を説明してある)
- 8 『人間形成の経験的基礎』 日本としつけと児童の性格形成の研究 (日本教育心理学会第10回総会宿題報告) 昭和42年
- 9 『幼児・児童の問題行動の研究』 (小田原女子短大紀要) 昭和54年
- 10 『横浜基地周辺騒音の住民生活への影響について』 (東京都公害研究所) 昭和46年 (この中に騒音の児童、幼児への影響の調査報告がある)
- 11 『WISC知能診断法』 共著 (日本文化科学社) 昭和38年
- 12 『WISC-R知能検査法』 共著 (日本文化科学社) 昭和53年
- 13 『保育効果の評価法の研究』 共著 (小田原女子短大紀要) 昭和52・53年
- 14 『児童のロールシャッハ反応の研究』 (ローンシャッハ研究) 昭和47年

保育の雪月花

川崎千束



雪月花の本来の意味は四季折々に楽しむ好い眺めをいうのであるが、私は保育に就ての所感を、雪・月・花とわけて、まず雪と思うことから書き進めてゆきたい。

雪 その一

銀嶺、雪明りなど俳句の季題になるような雅なものではなく、雪冷えと表現したい程の冷え冷えとした現実を直視すれば、助成金の使途が問題として浮上する。

法人幼稚園に附与される助成金は、園児の保育に必要な

ものを買ひ、且つ園で働く人々の福祉を目的として助成されるものと信じていたのであるが、学法幼の中には、助成金の使途不明の上に、「理事長が勝手に使用してよい金」と広言してはばからぬ設立者もあつたりするので、この点を県の係官に質問すると「老千万以上助成する園には係官が出向いて綿密に調査するが、それ以下の園へは人手不足で出向調査は不可能である。したがって領収証によって確認するのみ」との応答であつた。なるほど、一ヶ年間に各園に出向き助成金の使途を調査するには、人手不足であろうことは合点されるのであるが、私たち保育者はやむをえぬ

事情の為に人手不足に遭遇する場合がしばしばあるが、皆

の協力と工夫とによってその欠落を補ってきている。それ

から考えれば県の係官の人手不足という弁も職務怠慢では

なかるうか。領収証だけで助成の金額と合致すれば良いと

いうやり方も心もとなない感がある。領収証は稍々もすると

鯉を狸と書き誤り易い不安がある。その県では教職の免許

状を持たない者は園長を許可しないという進歩的な県条令

を示した程であるから、徹底して折角の親心である助成金

が、まっとうに使用されるよう尽力を願いたいものである

。一方法として（既にこの方法が採用されているなら更

に強化して）理事会の議事録には各理事の印鑑でなく自筆

の署名を、また必ず園長自筆の同意書を添付すると規定し

たなら、鯉を狸式の領収証より信頼がおけるのではない

か。現行法だと雇われ園長には議事録はおろか、助成の金

額さえ報告されずに事が運ばれている事実を体験してい

る。私は今更過去になった非をあはこうとするつもりはな

いが「使途は理事長の勝手」という暴言がまかり通る体質

が、流れるままになってしまふことを憂慮するものであ

る。裏面の政治との結託、権威への盲従、そして大切な幼

児たちや保育者にその皺寄せがくるという気運を幼児教育

界からは追放したい一念からである。

その二

“幼稚園の保育時間を延長して欲しいという希望が多く
の母親から提起されている”と、ある地方の園長から耳に
した。結論から言えば私は反対である。

母親のアルバイト（住宅ローンの返済などのため）が、
ますます増えつつあるのがその理由のようである。私自身
職業を持っていたし、女性がその能力に応じて職場への進
出も賛成であるし、男女平等論にも真向から反対はしな
いが、その平等は価値観から言うのであって、男女の性別
によってその担う分野はおのずと違ってくると思う。女性
には天与の子育てという誇らしい仕事が授けられているこ
とを改めて考え直してみたい。

時々TVの自然のアルバムで鳥獣の世界の子育ての実況
が映出されてその真剣さに胸打たれるのであるが、今年の
花の頃、たまたま雀と四十雀との間に起った巣箱の争奪。
巣づくりの涙ぐましままでの努力を目のあたり見て、種族
生存への執念に深い感銘をうけた。私は建前としては幼児

期には母親は家庭にあって欲しいと願うものである。それこそその為政治的に助成の手が打てないものかと考える次第である。

子どもの施設というものは、オーエンの昔から母親の為に創設されたものではなく、紡績事業華やかなりし時代に、母親が働きに出てマンチェスターの街に浮浪する子どもが多くなり、その子等のために創設されたものであると聞き及んでいる。

幼稚園の保育時間を延長することによって母親はその分だけ気楽になろうけれど、子どもの疲労と情緒が不安定になるのを考えたことがあるのだろうか。ひるね、間食、たまた入浴の設備などがあるのだろうか。保育園は生活の場としての条件が考えられているが、現在の幼稚園の殆どが前記の条件に叶う設備を持っていない。その保育園ですら私の身近な者の体験によると、

——子どもを保育園に預けていた頃、四時には必ず迎えに行つた。我が子は母親の迎えを知ってチラと母の方を見るだけで遊びを続けているが、他の子たちが「小母ちゃん」と寄ってきて抱かれたがったり、手足をひっぱったりする。そんな中で我が子だけをどうしても連れ帰られず、

一緒に遊んだり散歩に連れ出したりして、結局は五時になつてしまつたけれど——と述懐している。

この話をきいて保育園の子どもたちが、切ないまで母や家を恐る気持ちが推察され、幼い頃からあきらめの醒めた境地にあることがいじらしくなる。このことを母親たちは母心として理解しているのであろうか。

その三

幼稚園の保育時間延長の余波を保育園がうけて、現行の八時間保育を十時間保育に延長するような気運になつてきているという。その事に対して保育園に働く人たちはげげにも、「八時間が十時間になつても致しかたがないが、せめて月一回、規定以外の休日が欲しい。自分たちはいつも忙しく働いているので働き人同志の横の連絡が不十分であるから、この一日を利用して子どもめいめいのことや保育のあり方を話し合いたい」そう考えて規定以外の休暇を母親たちに諮つたところ、代表が民生局に出かけ陳情となつた。

民生局の答は「そんな身勝手な休暇はとらせられない。

若しそれを実施するなら助成金にもかかわってくる”とのことだったとか。

想うに、民生局のお役人方は週休二日制などには見向きもされない勤勉家揃いなのであろう。

月 その一

雨露のめぐみとは、月の光にかかわるものであろうが、陽光のあまなき暖かさはない。

このほど東京周辺の私立幼稚園の中には温水プール増設を企画されはじめたと聞く。助成金の使途不明とは異り、園児保健の為にその金をあてられ、なお国民皆泳の視点からすれば結構なことであろう。が、幼稚園にそれを採入れるのは如何なものであろうか。省エネ時代であつてみれば、温水プール使用後の保温は充分なのか、衛生管理、保育者の疲労等危惧されるものが多くある。日本は四季の感覚を豊かに肌で感じられる有難い国である。温水プールがますますビニールハウス栽培的人間を育てる温床にならないだろうか。それが杞憂にすぎなければ幸であるが慎重な配慮のもとに実行されんことを切望する。

その二

保育の月刊誌にはどうしてこうも挿絵が多いのかと不思議に思う。保育にたずさわる者は少くも短大以上の教育を受けている筈で、さし絵の補助を受けずとも内容の理解は容易であらう。深代惇郎氏は天声人語で、

廿代といえは体力だけでなく知力もまた絶頂のころ。あらゆる知恵が乾いた砂に水が浸み込むように頭に入る時期だ。人間いかに生くべきかを思うのは青春においては無いと。

若い保育者はおおむね廿歳代である。玩味すべき言葉である。さし絵の多いあり方は保育者を低俗視しているのではないかと僻みたくもなる。とあれ、立派な先生方の書かれた内容がさし絵のあることによってマイナスになる面は確かである。

花 その一

若い保育者がいきいきとした語調で、

「去年の運動会では鼓笛隊を編成したので随分苦勞しました。第一子どもたちに可成りの苦勞をさせました。それが今年はやらなくてもよい事になりました。私たちが皆で、子どもたちに無理がかかる実例を話し園長先生にお願いしましたら『——なら、止めましょう』と仰ってくださいましたからです」

その園の保育者は皆よく気が揃い保育のことも、ざっくりばらんに話し合っていると前々から聞いていたから、この話もうなずけるし園長先生の断にも感心した。この園の園庭は子どもたちの登園する前に、いつも清々しく掃き清められていることと相関する話である。

その二

一年生になった母親からの報告である。

家庭訪問に来られた先生にA男が「テレビに映っているれんげ畑はすこしちがうよ。れんげの花はあんなにいっぱい咲いてないもの、葉っぱが多くその中に花があるよ」と言っていました。遠足でれんげ摘みに行ったのでよくわかっていたんですね。実際テレビに映出されると一面花だら

けのように見えますものね。

その三

台風一過の朝の路上で、みの虫が葉っぱに包まれたまま落ちていた。それを拾いかけた子に母親はあわてて「みの虫よ。ほら、うちの桜の木にもぶらさがっているでしょう。捨てるのはおよしなさい」と制止の声をかけたら、「ちがうよ。朝のこの道は自動車がよく通るから轢かれると可哀そうだから、道の端に除けて置いてやるの」

その四

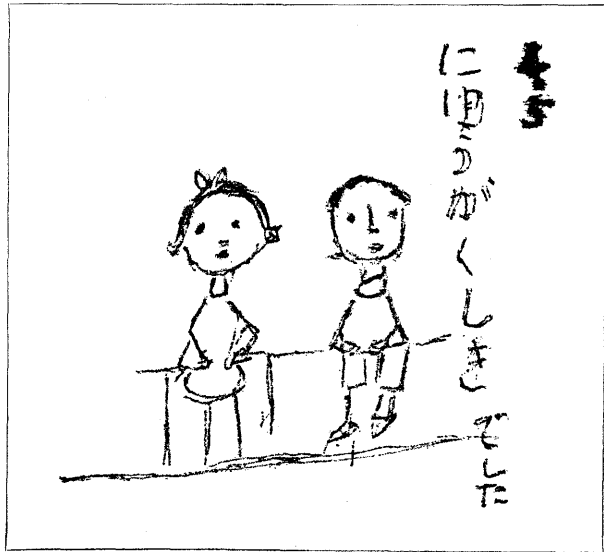
四歳の正月から欠かさず日記を書き続けている子の日記帖を見る機会があった。親たちの職業が文字に関係があるので、教えられもしないのに文字を書くようになったとか。年長組になってからは、漢字を書きたがり、自己流の音標式発案の字が書いてあるので、判読に苦勞したが、それだけに興味もあった。

干柿を☆がぎ。横断を大だん。鬼ごっこをおごごご。

今日を京（京都に住んでいるので）給食を急しよく。（阪急デパートでおぼえた急の字）等々。
 心ひかれたのは、保育園に在園中の絵日記には男の児とばかり遊んでいる絵なのに、入学式の日の絵は、俄然女の児と並んだのが描かれ、見るものをしてその緊張が伝って

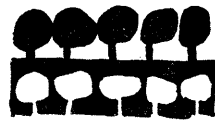


くるほど神妙な表現である。入学という画期的なことと女の児と並んだことがよほど印象的だったのであろう。この子どもたちの新鮮な気持を小学校の先生はがっぷりと受け止めてもらいたいと思う。



歴史人口学からみた生と死

一



鬼頭 宏

一、歴史人口学

(一)

高校三年のあるクラスで、「現代社会」という言葉から何を連想するだろうか、と質問したことがある。返ってきた答えはそれぞれ断片的であったが、互いに関連づけてまとめてみると、意外

に本質的に現代社会の特徴をとらえていた。その現代社会観は、科学と技術の発達は人類に物質的豊かさとも人口増加をもたらしたが、同時に、資源渾濁、環境汚染、大規模な国際紛争、人間性の喪失といった難を生み出した」と要約できる。近代経済成長そのものが人類の首をしめるようになったという危機感が色濃く、その中でも人口増加に関わる問題がとくに強く意識されているようだった。教職課程の授業に出ている大学生にこの話をすると、近頃の高校生はすいぶん悲観的なんですなあ、という感想が戻って来

た、

しかし別の機会に、高校一年生たちに対して、「人口」という言葉から連想する事柄を答えてもらったときにも、人口過剰が深刻に受止められていることを知った。かれらにとって身近な受験戦争から始まり、就職難、住宅難、公害、食糧不足、石油危機、さらに犯罪の増加から戦争にいたるまで、人口過剰はまさに諸悪の根源にされてしまっている。

確かに、ヨーロッパには人口増加率がきわめて低い国々があるにしても、先進工業国にとっても発展途上国にとっても、人口過剰が現在および近い将来の最重要課題であることに間違いはない。

現代の人口増加は、近代の産物である。それが加速され始めたのは、十八世紀後半、ヨーロッパの一隅で産業革命が開始したのと相前後している。ある推計によると、一六五〇―一七五〇年の人口増加率は年率〇・三―〇・四％でしかなかったが、その後徐々に大きくなって、一八五〇―一九〇〇年に〇・七％、一九〇〇―一九五〇年に一％、そして一九六〇年代には二％にも昇った。その結果、一七五〇年に七億五千万人（十一億人）と推計された世界人口も、今では四十億人を超えてしまった。

過去二世紀にわたって続いてきた人口増加の主導権は、もっぱ

ら死亡率の変化にあった。新しい性質の資源利用と科学技術の応用による著しい生産性の上昇は生活水準を向上させ、それにひき続いて医薬品や医療・衛生技術の進歩があった。この両面から死亡率の低下が実現したのである。初めその効果は先進地域に限られていたが、第二次大戦後にはDDTや抗生物質が導入されたことから、発展途上地域の人口増加が著しくなり、現在では増加の中心はそこへ移っている。

先進地域では工業化が始まってしばらく経つと、出生率にも変化が生じた。出生率は、初め、死亡率が改善されていったのにかかわらず、高い水準に留まっていた。ところによっては上昇した地域さえあった。ところがある時期（例えばイングランドにおいては一八八〇年以後）になると、死亡率の低下に追いつこうとするかのような動きをみせてついに低い水準で出生率と死亡率が均衡するような状態が訪れたのである（イングランドでは一九三〇年代）。こうして先進地域では自然増加率は縮小した。多産少死が実現される過程は「人口転換（demographic transition）」と呼ばれている。発展途上地域で人口増加率が依然として高く、人口爆発が続いているのは、未だ人口転換が実現されていないからである。

前工業化社会と工業化社会の人口学的なちがいは、人口規模や

その増加速度、あるいは都市人口の増大や第一次産業従事者の相対的減少だけに限られない。出生率と死亡率の水準の組合せの変化、すなわち人口転換は人の一生に測り知れない影響を及ぼしている。例えば低死亡率は平均余命を伸ばし、人口の年齢構成は高齢化した。乳幼児死亡が改善されて、より少ない子どもを持つだけで人口が維持されるようになって、二人きょうだいや一人子があたりまえになった。

このような一連の人口学的変化は、とくに女性のライフ・サイクルを大きく変容させる。男よりも余命が長くなった結果、未亡人になる確率が高まることも一例である。出産回数の減少は子孫の再生産を目的とすることから、結婚の意味を変化させた。また女性の一生に占める子育ての期間が相対的に縮少して、脱養育期の、自由な時間が長く得られるようになったことも、重要な変化の一例である。

ところで、わが国の人口転換は欧米の先進諸国とくらべても相当短かい時間で実施した。イギリスで二世紀近く費して起きた変化を、日本では半世紀足らずで達成してしまった。変化が速かであることは日本人の適応力の表われかも知れないが、あまりにも急速な人口学的変化の到来はさまざまな面でわれわれを当惑させている。同時に起きた核家族化現象とともに、高齢者の地位と役

割、長くなった一生の過ごし方、育児から解放された女性の仕事、親子関係のあり方などをめぐる新しい秩序が確立したとは言えない。これらの変化は工業化の歪みなのではなく、本質的な変化の結果なのである。ただ急激な変化に、意識、慣習、制度が追いついていけないところに問題がある。

このような課題に対処するために、歴史の光をあててみることは有益だろう。そのために歴史人口学の手を借りて、江戸時代には有る人々の一生を探ることにしよう。江戸時代はさまざまな面で、現代日本人の生活と意識を生み、育ててきた時代である。まず、近世から近代への人口学的変容の全体像を、客観的に認識する必要がある。

(一)

昨年十月一日に第十三回目の国勢調査が実施された。国勢調査は、人口に関するもっとも基本的な調査であるが、近代的センサスは欧米においても十八世紀から十九世紀にならないと行なわれない。最も早いアメリカが一七九〇年、一八〇一年にイギリス、フランス、デンマーク、ポルトガルで始められた。続いてノルウェー(一五)、オーストリア(一八)、オランダ(二九)、スイス(三七)、ベルギー(四六)、スペイン(五七)、ルーマニア(五

九)、イタリア、ギリシア(六一)、ドイツ(七一)、ブルガリア(九三)、ロシア(九七)とヨーロッパ諸国で行なわれるようになった。

近代的な人口センサスが実施されるより前の、過去の人口現象を研究するのが歴史人口学の仕事である。センサス以前の人口について知るには、散発的に行なわれた人口調査、戸籍簿、住民台帳のほか、徴税台帳、墓碑、系図などの間接的な資料を利用するしかなかった。したがって、最近に至るまで、産業革命以前の社会の人口統計は信頼度が低く、普通出生率や普通死亡率という基本的な数値すら正確に得ることは困難だった。

史料上の壁を打破って歴史人口研究に、画期的な、精緻な方法がもたらされたのは、一九五〇年代の後半である。史料処理の新しい方法が社会科学としての歴史人口学を確立した。成立してからやっと四半世紀ほどの、若い学問領域である。

ヨーロッパおよびわが国における、歴史人口学の誕生とあゆみを簡単に紹介しておこう。その発祥の地となったヨーロッパに登場した歴史人口研究の新しい方法は、「家族復元(Family Reconstitution)」と呼ばれている。これは、フランス国立人口学研究所(INED)の、アンリ(L. Henry)とフリェリ(M. Fleury)によって開発され、のちにイギリスに導入されたが、広範囲にわた

って多くの人口を対象とし、精緻で信頼度の高い人口学的指標を得ることを可能にした点で、まさに革命的であった。家族復元法はキリスト教会の教区簿冊(Parish Register)を史料として利用する。教区簿冊とは、教区住民の洗礼(出生)、結婚、埋葬(死亡)の人生における三つの重要な宗教的儀式を記録したものである。個人別に、日付順に記録されているので、追跡調査を行なうにはその中から同一の姓名を拾い出して出生から死亡にいたる一生を再構成し、さらに親、子、配偶者の姓名を手掛りに夫婦家族を復元する作業が必要とされる。ゲームの家族合せと同じことで気の速くなるような作業であるが、ここから家族復元法の名が生まれた。教区簿冊はイギリスでは一五三八年、フランスではおよそ一六七〇年頃から利用可能である。近代的センサスに至るまでの前工業化社会の人口研究がこれによって可能になった。

その成果は、一九五八年アンリによって初めて発表された(E. Gauthier et L. Henry, *La population de Crulai, paroisse normande*, 1958)。ノルマンディ地方の一教区に住んだ人々の、結婚と出産をめぐる詳細な分析である。アンリはこの著作に先立って、一六世紀から一九世紀にいたる系譜を資料として、ジュネーブ市民の人口学的観察を発表していたが、このときに開発されたFRF(Family reconstruction form)と呼ばれる基本整理フォームが、

教区簿冊を利用する上で、おおいに役立つことになった（FRFとは夫婦単位に作られ、結婚年代、出産、出生児の行衛などが記入される整理フォームである）。

続いてフランスでは、家族復元こそ行なっていないが、教区簿冊から得た出生、結婚、死亡などの人口変動を、物価・賃金史と組合せる方法によってボーヴェ地方の人口と経済の関係を明らかにしたグベールの研究が発表されている（Goubert, P., *Beauvais et le Beauvaisis de 1600 à 1730*, 1960）。

イギリスに新しい方法が導入されたのは一九六〇年代になってからである。フランスでは歴史人口そのもの、あるいは経済史に関心が集まっているのに対し、イギリスでは家族史、社会構成体史に重点が置かれているようである。ラスレット（P. Laslett）、リグリー（E.A. Wrigley）らを中心に研究グループ（Cambridge Group for the History of Population and Social Structure）が組織されて、地方史家の協力を得た、全国的規模での研究が進められている。

リグリーは個別的研究の成果を総合して、人口と経済、人口と社会の関連を歴史の流れの中でとらえた格好のテキストを著してゐる（E.A. Wrigley, *Population and History*, 1969, 速水融・訳『人口と歴史』一九七二、平凡社）。ラスレットによる「十六〜十

九世紀の住民台帳を利用した、イングランドにおける平均世帯規模の研究も、産業革命以前から夫婦家族が一般的であることを証明した点で注目される（Laslett, P., *Mean household size in England since the sixteenth century*, Laslett, P., and Wall, R., (ed.) *Household and Family in Past Time*, 1972）。

現在ではフランス、イギリスにとどまらず教区簿冊がつけられた地域、すなわちヨーロッパの諸地域や北アメリカ、南アメリカはもとより、アフリカ、アジア地域においても、同様の方法で研究が行なわれている。また研究組織をつくりコンピュータを導入して資料処理することによって、大規模な地域研究が各地で進められるようになった。

(三)

日本における人口史研究には、戦前、戦後にわたって活躍された本庄栄治郎、高橋梵仙、関山直太郎等による先駆的な業績があったが、夫婦や個人の人口学的行動分析を含む歴史人口学的研究は、ヨーロッパにおける研究方法の発展の刺激を受けるかたちで、一九六〇年代の後半から始められるようになった。

研究者の関心と研究方法からみると、わが国の歴史人口研究は二つの潮流に分けることができる。

第一は社会医学からの接近である。国民の健康を正確に把握するためには、なるべく長い期間の衛生統計を得ることが望ましいとの立場から出発している。すでに一九六〇年代前半には個別研究が幅広く展開されていたが、一九六五年に日本民族衛生学会が「過去帳研究委員会」を設置したことによって、研究者が全国的な規模で組織され、さらに活発な研究活動が進められるようになった。

この立場から利用される資料は、過去帳、宗門改帳、系図、戸籍簿と多方面にわたるが、衛生統計、とくに死亡統計に主眼が置かれるために、寺院の過去帳が中心になっている。なかでも、須田圭三が飛驒の一寺院の過去帳をもとに行なった、一七七一年から一八七〇年にいたる人口動態・死因分類などの分析は、近世農村の疾病状況を明らかにできた点で特筆されるべき業績である(須田圭三『飛驒の寺院過去帳の研究』一九七三)。

歴史人口研究の第二の立場は、社会経済史からの接近である。人口は経済から独立したのではなく、経済の従属変数として一方的に影響を受けるものでもない。人口と経済の相互関係を正しく理解することが経済発展や経済成長を考えるうえで重要である。このことが認識されるようになって、初めて社会経済史の中に人口研究が正しく位置づけられることになった。この立場から

の研究は一九六〇年代後半に、速水融によって精力的に始められた。氏の依拠する資料はおもに、長期にわたって残された宗門改帳である。広範囲の地域に残存する宗門改帳を結合して、平均世帯規模の変化を分析した、諏訪地方や濃尾地方の人口史研究、ヨーロッパで開発されたFRFを利用した夫婦の行動追跡調査、そして近年は個人の詳細な行動追跡へと、氏の研究は深化している。初期の成果は『近世農村の歴史人口学的研究』として集成された(一九七三、東洋経済新報社)。

都市人口の分析は少いが、佐々木陽一郎の飛驒高山の研究は、わが国で初めて本格的にコンピュータを利用した個人追跡調査である。シミュレーション・モデルによって、町人口はそれ自身で人口再生産できず、周辺村落からの人口流入が必要であることを証明した(佐々木陽一郎「江戸時代都市人口維持能力について」社会経済史学会編『新しい江戸時代史像を求めて』一九七七、東洋経済新報社)。

宗門改帳の資料的価値は、最近では海外の研究者によっても評価されるようになり、アメリカのスミス(Smith, T.C., Nakahara: Family Farming and Population in a Japanese Village, 1717-1830, 1977)・ヤントマン・ハンレー(Hanley, S.B., and Yamamura, K., Economic and Demographic Change in Preindustrial Japan,

1600-1868, 1977) らによって業績がすでに刊行されている。

一九六八年に社会経済史学会は大会の共通論題に「経済史における人口」を採り上げ、同名の報告書を上梓した(社会経済史学会・編『経済史における人口』一九六、慶応通信)。一九七〇年には日本人口学会大会のシンポジウムにおいて、「歴史人口研究における諸問題」が討議された。このように歴史人口への関心は、近年高まってきたとは言え、研究組織や体制は十分ではなく、社会医学の立場と社会経済史の立場の交流や協力も今後の課題として残されている。

(四)

江戸時代の人口現象を知るにはどのような史料が利用できるだろうか。初期には諸大名が行なった、所領経営のための人畜改、人数家数改などと呼ばれるセンサス史料がある。全国人口(庶民人口)に関しては、一七二一(享保六)年に初めて行なわれ、一七二六(享保十二)年以降、子歳と午歳に実施された幕府の全国人口調査があり、一八四六(弘化三)年までの全国人口、国別人口を知ることができる。死亡統計を作成するためには寺院の過去帳が、時に有効な資料を提供してくれる。一部の地域で実施された妊産婦の調査(懐妊書上)は出産に関する情報をもたらしてく

れる。また江戸時代につくられた地誌や物産・人口調査等の記録は、経済と人口の関係を知る上で貴重である。このように数えあげていくと、これまで気付かれていなかった史料が工夫次第で歴史人口研究の資料になりうることも考えられる。

しかしこれまで、豊富な情報を与えてくれるために、最も重要な人口史料として利用されてきたのが宗門人別改帳(宗門改帳)である。宗門改は幕府のキリスト教禁止政策を遂行するために行なわれた制度である。十七世紀初期にキリスト教が禁教とされると、庶民はすべて仏寺の檀家になることが強制され、仏教徒であることが仏寺によって証明されなければならなかった。これが宗門改だったが、一六七一(寛文八)年に諸代官に宗門人別改帳の作成が命じられていらい、旧来の人別改と宗門改が一体化し、それが江戸時代の戸籍簿として機能するようになった。宗門改帳は年一度、一定の方式のもとに町や村を単位として作成されるのが普通である。記載される内容は、世帯ごとにその構成員の名前、性別、年齢、世帯内の地位、宗派、檀那寺などである。帳簿は二冊作成されて、正本は領主に提出され、副本(控)が町村に保存された。われわれが利用できるのは普通、控書の方で、これには名主・庄屋が次年度の帳簿を上げるための心覚えとして書きこんだ朱書や貼紙がしばしばあって、人口異動を知ることでもでき

る。人数増減帳が、宗門改帳と共に作成されることもあった。

宗門改帳には、乳幼児の記録が不十分であったり、記載されているのが本籍人口なのか現任人口なのか明確でない問題がある。

また町村単位に分析が限定されてしまうなどの短所もないではない。しかし、教区簿冊を利用するうえで、最も困難な作業である家族復元は、宗派別に宗門改帳が作成されている場合を除いてほとんど必要がない。そのうえ、毎年継続し人口センサスを行なうたに等しいデータを得ることができると、驚くべき史料と言わなければならない。長期にわたる、詳細な人口動態や、個人・夫婦・世帯のそれぞれのレベルにおける追跡調査にとっては絶好の資料を提示しているのである。

(五)

これから紹介していく歴史人口的研究の成果は、史料の採訪に始まり、マイクロ・フィルムへの撮影、読み取りとデータ・シートへの転写、集計、そして統計処理と、ごく単純ではあるが単調な作業の積重ねから生み出されてきたものである。一見、無味乾燥な数値の羅列にすぎないと思われることがあるかも知れない。

しかし、それを注意深く再構成することによって、江戸時代庶民の日常生活の断面が蘇ってくるはずである。歴史人口学とはそう

いう意味で、たんに「あたま数の歴史」にとどまっているのではなく、字義通り、過去の民衆に関する歴史―「歴史民勢学」(丸山博)なのである。(上智大学)

〔付記〕本稿の作成にあたって、速水融・他著『数量経済史入門―日本の前工業化社会―』(日本評論社、一九七五年刊)を利用させていただいた。歴史人口学について関心をもたれた方は、このほか、次の本を読むことをおすすめする。

E・A・リグレイ『人口と歴史』(世界大学叢書017)一九七一

平凡社

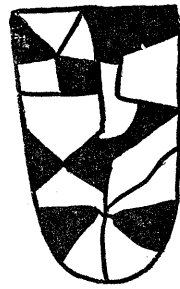
安元 稔「歴史人口学と家族復元」梅村又次・他編『数量経済

史論集1 日本経済の発展』一九七六 日本経済新聞社

速水 融「人口史的アプローチ」、角山栄・速水融・編『講座

西洋経済史V・経済史学の発達』一九七九 同文館

わたくしの
シルクロード ⑧



横張和子

シノ・イラニカ錦

前回、掲げた法隆寺蔵の四騎獅子狩文錦は藍地に大ぶりの珠文を連ねた円環の中に、一本の果樹を中心にして、その左右に三日月と鳥翼の冠をつけ、天馬に騎乗して、弓を放つ貴人の狩猟のさまを織り出しています。その胡人の相貌から、これはササン朝ペルシアのホスロー二世（在位590～628）とその愛馬をモデルにして製作されたという説もあったことはすでに述べましたが、これを東京三鷹の中近東センター所蔵のイラン・ギーラン州出土の銀

製皿の帝王狩猟図と比較してみましょう。（図版①）大宛（フェルガナ）の汗血馬を思わせる精悍な駿馬に騎乗した両者の鼻高く、濃い髻をたくわえたプロフィールはきわめて酷似していて人種的な共通点では一致します。頭上のにせている大きな球体をのせた城壁冠からこの騎馬人物はササン朝十代の王シャール二世（在位309～379）の狩猟を描くものと解されています。帝王の姿はかりでなく、筋肉の緊張感をみながらさせた獅子の描写についても酷似した手法です。錦では馬腹に漢字がみえていて、これが中国人の手になることは間違いないところですが、おそらく錦の意匠家はこうしたペルシアの銀製皿を手許において図案化を練ったもので

しょう。中国化は処々にみられるところですが、今回はこの錦に盛り込まれたイランモードのいくつかを探ってみましょう。

まず相対する騎馬人物の間にすえられた一本の樹木からみていきます。樹は下方に広がる数枚の葉の上に赤い果房をのせてこもりと繁り、そのまわりに鳥が飛び交っています。それは先にあげたシノイラニカ錦の樹木に共通していますが、赤い果房は葡萄の実をあらわすものでしょう。かなり観念的になっていて仏教美術にみられる菩提樹のようになっています。それは中国化のあらわれの一つでもありましょう。一本の樹を中央にすえて、その左



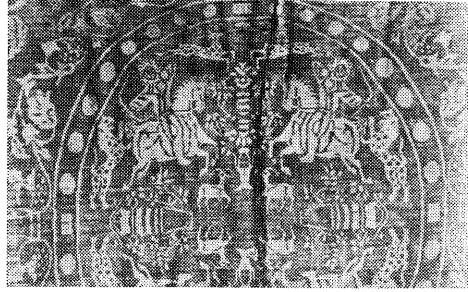
▲図版① 帝王狩獵図銀製皿

中近東センター所蔵

右に動物を配する図様は古くから西アジアでは行なわれていまし

た。イラン高原では農耕と牧畜の生活が始まると、それを左右する季節と天候とは人々の最も重要な関心事となりました。ことに乾燥を恐れた人々にとっては雨水の源泉である天空に対して、つねに心をくばり、天空神アフラマズダにむかって、慈雨の恵を祈願する声は切実でありました。その願望の中にやがて天空には雨水を貯える大海や天空の水の湧き出る泉があるとか、さらにその海の中にある山には聖なる月の樹があるとかいう信仰をもつようになりました。この海あるいは泉には一本の聖なる木があり、その名をハオマまたはガオケレナと呼ばれました。ハオマは葡萄の木のこと、それから搾った液（葡萄酒？）を飲むと不死の生命を得るといふ生命の木です。ガオケレナは「牛の角」という意味で、これは天空に蒼く光る三日月の形が牛の角に似たところからきていて「月の樹」の意味となっています。イラン創世紀（アヴェスター）では月は水を与えるものとしてたたえられています。三日月型の宝飾がササン朝の帝王の冠に飾られる時には「月の樹」の意味がこめられていると考えられます。

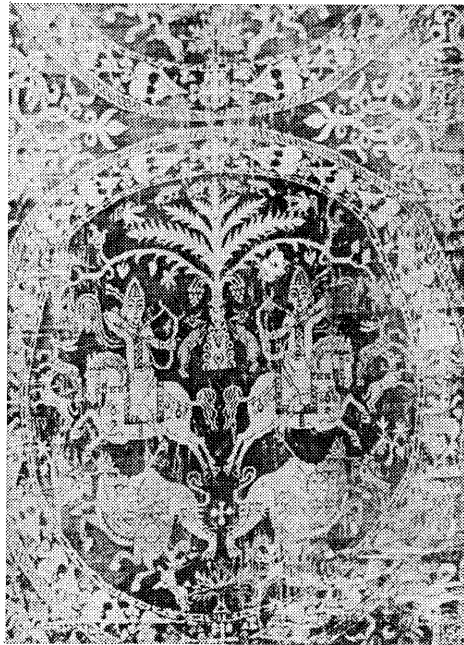
次は狩獵文です。初唐の名将であった李靖という人の紫の衣の文様は「上に林樹、その下に馬を馳せて射るものがあり、またこれに雜えて狻猊（獅子）、狗、駱駝などがあった」ということで



▲図版② 四騎獅子狩文錦

奈良正倉院（複製）

すが、わが正倉院蔵の碧地狩獅文錦の図柄はほぼこういった情景を織り出しているものでしょう。（図版②）葡萄唐草と連珠文の円文の中に聖樹を中心に、馬上から振り返りざまに襲いかかる猛獣を騎射しようとする胡人を描き、そのまわりに野羊や鹿をまじえそれに草木などを配しています。法隆寺錦と共に東方における狩獅文錦の好例ですが、これらによく比べられるものにヨーロッパの古いキリスト教寺院に伝えられ、世に出た両方の狩獅文錦があります。それらがササン朝のペルシアで製作されてヨーロッパに

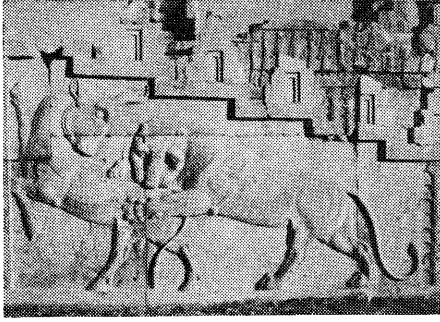


▲図版③ パフラム・グールの狩獅文錦

ドイツ ケルン大聖堂所蔵

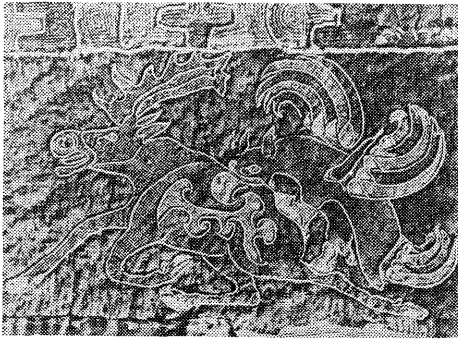
運ばれたという確証はなく、むしろビザンチンやシリアあるいはエジプトのアレクサンドリアで製作されたもので、九世紀ごろから聖人の遺物と共に教会に納められたものです。その一つにパフラム・グールの狩獅文錦というがあります。（図版③）グール（ろば）という異名をつけられたパフラム五世はろばに襲いかかる獅子を射殺した武勇伝とその恋愛の物語で古来ペルシア人の称賛を得ているササン朝の王ですが、ここでは中央におかれた聖なる樹は西南アジアのオアシスの人々の生活の樹とも言われる棗椰ちやう

子です。円帯を飾る模様もエジプトのコプトの織物にみえるハート形の花模様であることなど、法隆寺錦など東方の錦とはかなり趣きを異にしています。銀製皿の狩獵図のような気迫も薄れてしまっているのは、おそらく初めの錦の度重なる模写のうちに徐々に変化してしまったからでしょう。しかし騎馬人物の下方に鹿を襲う獅子の図が描かれているのは興味深いことです。弱い動物が強い猛獣に襲われるということは、西アジアの荒野では普通のことであったのかもしれませんが、そうした弱肉強食の動物の闘争

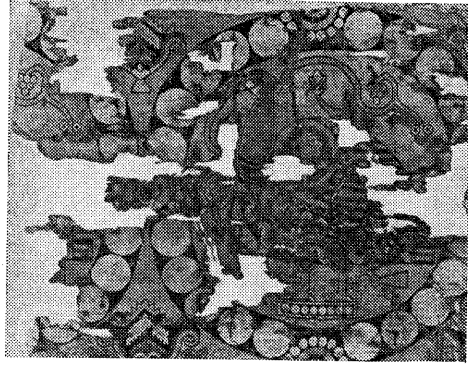


▲図版④ 一角獣をおそう獅子の図
ベルセポリス

の場面を単に写したものとすよりは、なにか神聖な力の闘争を意味したようです。古代のイランの人々はこのモチーフを季節の交替をあらわす象徴としたのです。乾いて澄み切った空気の夜空に輝やく星座の出現に関連づけて、獅子座を夏至、山羊座を冬至、牡牛座を春分として、例えば獅子が野羊を襲うのは冬が終りを告げて夏にむかうことをあらわしていたのです。アケメネス朝の王都であったベルセポリスの遺跡の謁見殿（アバダーナ）の正面階段には獅子が一角獣（雄牛か？）を襲う図が浮彫であらわさ



▲図版⑤ 動物闘争文
刺繍 イラン ウラ出土



▲図版⑥ 昨鳥文錦

ローマ ヴァティカン美術館所蔵

れています。(図版④) それは古代イランにばかりあったのではなく、広くユーラシアのステップの民族の間に盛んに造型化されてきました。(図版⑤) それがなおビザンチンやシリアの錦文に息づいていたとみることができでしょう。

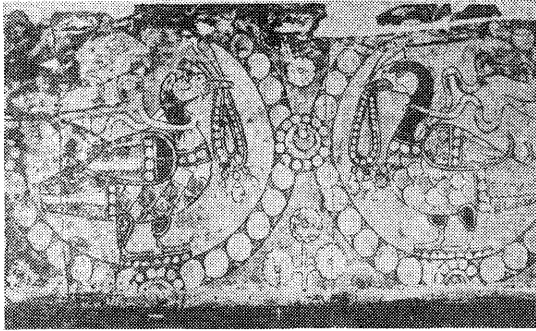
狩猟は人類の生活の技術として非常に古くからあったことで、そのさまを描写することは原始芸術以来みられます。獅子狩といった特殊な狩猟も前七世紀の好戦的なアッシリアでは戦闘の訓練



▲図版⑦ 猪頭文錦

として獅子狩を行ないましたし、後漢代にはその朝廷にパルティア王国から二度にわたって獅子が献上されているので、イラン高原からメソポタミア地方には、むかしかなりの獅子がいたものと考えられます。そのためか、古代オリエントには獅子が怪獣を退治するモチーフがありました。この場合狩猟するものは太陽神シヤマシユかギルガメシユのような神話的な英雄で、狩猟文は神々や英雄の権威的なものの象徴でありました。ダリウス大王の印象

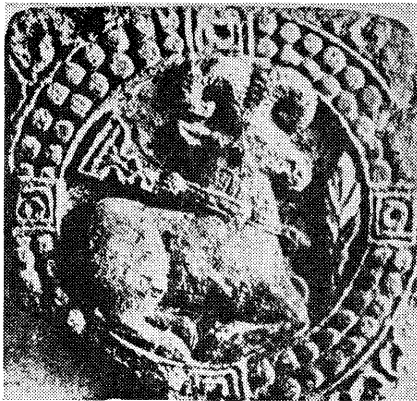
には馬車から獅子狩をする光景とこれを祝福する天空神アフラマズダと二本の聖樹があらわされています。ササン朝の歴代の王はアケメネス朝以来伝統の国教であるゾロアスター教の最高神であるアフラマズダにより地上につかわされた支配者であると信じられていましたから、帝王の獅子狩はその権威にもっとも適わしい姿とされたのでしょう。



▲図版⑧ 昨鳥文を描く壁画

トルファン・キジル最大洞

ところでギリシアの史家ブルータルコスは北西イランのメディアにアルタクセルクセス大王の王室の遊園があったことを述べています。そこには美しい花の咲く草木や果樹が植えられ、こんこんと清水の湧く泉や池があり、水鳥や鳥が泳ぎ、各種の動物が多数放し飼いされており、時折、大王はここへ来て、遊園を楽しんだといっています。この庭園のことをバイリダエザといったそうです



▲図版⑨ ストゥッコ浮彫

クテシフォン出土 ベルリン
カイザーフリードリッヒ美術館

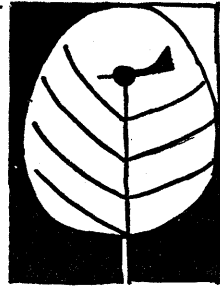
が、それがギリシア語のバラダイスの語源だそうです。

ビザンチン製のバフラム・グルルの錦の図様がにぎやかで華やいでいるのも、そうしたバイリダエザの狩猟を描くものであったのかも知れません。

法隆寺錦など一連のシノ・イラニカ錦では円文のぐるりを取り巻く連珠文の帯が特徴的なものの一つにみなされています。連珠文はベルシア系の美術に頻繁にあらわれてきて、あたかもそのトリードマークのごときですが、珠文は真珠をあらわしていることは容易に考えられます。古来ベルシア湾は真珠の名産地でローマの著述家プリニウスは月夜の晩に海上に浮かび上った貝が開くと、天空から露がおりてきて真珠になるのだと信じています。月の雫が真珠となるのです。それゆえ古代のベルシア人は真珠は天空の聖なる水あるいは火から生まれてくるのだと信じていました。真珠は中世ベルシア語でゴーフルといい、現代ベルシヤ語ではゴウハルすなわち寶石の意味となっています。しかし本来は原質すなわちすべてのものの元素という意味であったのです。だから聖なる水、聖なる火で、いわゆるフヴァルナと呼ばれる光明そのものにほかならなかったのです。フヴァルナはあらゆるものを生み出す原動力であり、真珠はその実体であったのです。フヴァルナはまたササン朝の王の栄光そのものでありました。それゆえ

真珠はもともと神聖な宝石として王冠の宝飾となり、また高貴なものシムボルとしてその首飾りになったのです。

連珠文はベルシア産とも考えられているヴァチカンの昨鳥文錦(図版⑥)、トルファン、アスタナ出土の猪頭文錦(図版⑦)、それに法隆寺錦の天馬に瓜二つのエジプト・エンチノエ出土の天馬文錦などの錦の円環を飾っていますが、円環の四方には再び小連珠文の円環があつて、内文に三日月がおかれています。それはキジールの洞窟の壁画にも描かれていて東方への波及を確実に伝えるものです(図版⑧)、やがて三日月文に替ってその位置には四角形の角文がおかれるようになります。連珠文と角文の組み合わせはベルシアになくはないのです。クテシフォン出土のストウッコ浮彫(図版⑨)やベルリンの織物美術館所蔵の野牛文錦にもみられますから、これもベルシアに起源をもつものといつてよいでしょう。しかし法隆寺錦に至ってはもはやベルシアの象徴的な意味にはさほどの意義を見出さず、むしろ積極的には意匠としての洗練が優先されたのでしょう。ベルシア文様を織りながら、単なる模倣におちいらず、端正な折り目正しいその意匠はさすが絹織物に長い歴史をもつ中国人のすぐれた力量であると思えます。この稿は、恩師筑波大学教授林良一先生の御指導を得ています。(山脇女子短期大学)



フ
レ
ー
ベ
ル
ゼ
ミ

立川多恵子

埼玉県は人口急増県の一つである。昭和三十年に約二二万六千人だった県の人口は、昭和五十年には約四八万二千人になった。約二・二倍の増加率である。

そこへもってきて、幼児教育に対する人々の関心は、近年ますます強まってきた。

若い夫婦の中には、県内に転居するため、子どもの入園を心配して、役所や、幼稚園にあらかじめ相談する人も出た。

県内の主な市部では、入園願書受付日には、早朝から幼稚園の門前に行列ができるのが通例だった。

園によっては地域の親達に頼まれ、やむおえず廊下で保育するところさえ出た。

こうして幼児教育ブームが人口増に拍車をかけ、県内には、幼稚園・保育所が次々に増設されるようになった。

昭和三十年には、公私立合わせて、一二三園だったものが、昭和五十年には六一三園にふえた。

そのさい園創設に大きな力を貸したのが、若い男性たちだった。幼児教育に関して素人が多かったのだが、幼稚園教育に対する取り組み方は極めて意欲的であり、だれいとうとなく幼児教育についての理解を深めるために研究会を持つとうではないかという話が出た。

会員数十余名、第一回会合は、「教育計画の立て方」についての話だったと記憶している。会員は、教育計画といえど、小学校以上のやらせるための指導計画しか考えられず、理解に苦しむ点もあった。

二回目の講師は筆者であり、「保育実践」について具体例を示して話した。実さい子どもと触れ合う機会の少ない男性に、子どもとのかかわりの機微をどう伝えたらよいか

悩んだ。

会員たちは、幼稚園では「何をどう教えたらよいのか、それをまず知りたい」と思っていた。子どもと交流のない人は何を話しても頭でしか受けとめられない。一日一時間でもよいから子どもとあそぶ機会をもっと欲しいと話した。しかし実さいは、バスの運転や事務的な仕事が多く、子どもとあそべる時間はなかなか生み出せないというのが現状である。それでも翌月の会合で、ある会員から次のような発言があった。「A夫が私に『おはよう』をしないので気になっていたが、昨日、とび箱を出して、じっくりつきあったら、今朝は、大声で『おはよう』と飛んでくるんです。子どもとつき合うということは、お互いにわかり合うことなんです」と。

会員の一人一人が子どもとつき合う機会をふやして、こうした体験を積み重ねて欲しいと願った。

次の会から私もメンバーの一員になった。講師の選定は会員同志話しあってきめた。最初の頃は講師の話を一方向的に聞く会だったが、やがて仲間では何かテーマをもって研究してみようということになった。

最初に手がけたテーマが「保育者の困る子どもの指導」

である。若い先生の相談相手になってやれたらという願いから生み出されたテーマである。

幼稚園に戻って、先生に「どんな子どもの指導に困っているか」聞いてリストアップし、話し合うことになったが「保育者の困る子ども」というのは、保育の在り方を変えれば、困らない子どもにもなる、むしろ「困る子どものいない保育」を勉強していこうということになり、会員からレポーターを出して話し合うことにした。

最初は、児童臨床の専門家のK先生が引き受けた。次回は私が引き受け、「生活指導」についてレポートした。特に話し合われたのは「挨拶」についてである。会員の中には、

「私の園では入園式当日、お互いに挨拶をキチンとしましょうと話している。親がお互いに挨拶をすれば、子どもも自然に出来るようになると思う。園長は人間関係の始まりは挨拶からだ」と主張しています。また別の会員は、

「いや挨拶だけを強要するのはおかしい、お互いの気持ちさえ通じていたら、挨拶は、『オス』だっていいではないか、先日、戸外で私の姿を見つけた子がいて、走ってきて背中をドンとたたいた。ふりかえったら、年長頭の○夫だった。

私は可愛かったので抱きかかえた。挨拶が出来る前に、お互いの気持の出会いが必要だ。それがあれば子どもも必要な時、必ず上手に挨拶してくれると思う」等、さまざまな意見が交換された。

次の回は、会員の一人に協力してもらい、実さいの保育場面をビデオに取って話し合いの材料にした。

場面は幼児のどろあそび、四人の男の子（四歳・五歳）が昨夜の雨で園庭の隅に出来た水たまりの二つを一つにして、一時間位かけて、池を作り、鳥をかため、トンネルを掘ってあそんでいたが、仲間の一人が裸足になると、次々に裸足になり、池の中に入り込み、ピチャ、ピチャ足でどろの感触を楽しんでいた。そのうち手で、どろんこをまるめ始めた。どろだんごが、それぞれの子どもの手で数個ずつ出来上った頃、一人がどろだんごを手にとると、園舎の壁に投げつけ始めた。一つ、二つ、三つ、どろだんごは白い壁にへばりついた。他の子も手にどろだんごを握ると壁に投げつける。壁はどろだんごで模様が出来た。最初に投げ始めたT夫は、何を思ったか、そばにあったバケツの水を、どろんこになった壁に打ちつけた。壁の模様は多少うす

くなった。今度は手で拭き取ろうとする。模様は大きく広がり、アブストラク的な壁画になった。

T夫は、水道まで走って行って、バケツに水を入れると戻ってきた。どろんこ壁画の前には、子どもたちが一ぱい集まった。バケツを持って戻ってきたT夫は、余りの人ばかりにおくれをなしたが、そのまま自分の部屋の方へ歩いて行ってしまった。

やってきた担任の先生は驚いて保育室に戻っていった。そして、どろだんごを壁に投げつけてあそんでいた子どもたちと一緒に雑巾やバケツを持って壁画のところへやってきた。まず担任が率先して、どろんこを落とし始めた。子どももそれぞれ手に持っていた雑巾で壁のどろをこすり始めた。なかなか消えない。雑巾をゆすいではふいてみる。何度も何度も拭いているうちに大分どろがおちた。そばでみていた男の先生たちはホースを持ち出して、高いところのどろを落とす。

私もバケツの水かえを手伝った。三十分位で壁面はもとの白さに戻った。担任は「きれいになってよかったね」と子どもたちに語りかけた。

映写時間は二十五分、会員はビデオを見ながら、盛んに

ささやいた。

会員「やった、やった、ほくもやった、思い出すナ」

会員「わたしもやった、叱られたけど……」

私「先生方は、こうした経験をお持ちの方が多くいようですけど、何時ごろですか」

会員「ほくの場合は小学校の時かな」

私「私の場合は小学校へ入る前だと思う」

私「どこでやったのですか」

会員「ほくは学校で、校舎の壁に」

私「わたしは土べい」

私「ほくは蔵の白い壁」

私「叱られたでしょう」

会員「叱られましたね。大あわてで逃げました」

私「わたしも、大声でどなられて、あわてて逃げる時、

溝に落ちたりして……」

会員にそれぞれ同じような思い出があるのは楽しかった。私自身も自宅の壁面にどろんこを投げつけ、母に叱られた日のことを思い出した。

私「近頃地域でこんなあそびが見られますか」

会員「見たことないですね」

「投げげる場所がないのでは……」

「いや、投げげる場所があっても、投げようとする意欲もなくなってしまうんですヨ」

会員「どろ投げが、子どもの成長に不可欠とまでいえないけれど、『いたずら』によって、エネルギーを発散することって大切じゃないかな」

会員「いたずらをして叱られる、それでもこりずに又やる」

私「叱り手のいることも大切でしょう」

私「幼稚園ではどうでしょう」

会員「ほくの幼稚園ではみられないナ」

「『ほくのところも見たことない、どうしてかな』」

「『ほくのところでは昨日もやりました、なにしろ隣りが小学校の体育館です。その白い壁面に向かって投げつけるんです。』

昨日は体育館の窓が開いていたので、中まで入りこみ、床を汚してしまいました。子どもを連れてあわてて校長先生のところへあやまりに行きましたが、『お宅の子どもは元気ですね』と笑って許してくれました。子どもと一緒にバケツと雑巾をもって掃除に行きましたが、なかなかおちなくて困りました、用務員の

おじさんにこっぴどく叱られ、子どももこりた様です」
会員「ほくの園は、厳しすぎるのかナ、子どももいたずら
をしないので謝りにいく心配はありませんが、その反
面、子どものびのびした行動が見られないような気
がします」

会員「先生、うちの園でもやっていますヨ、今朝も水たまりで『ピチャピチャ』と。とめようと思ったのですけど、しばらくみると、靴先だけぬらして止める子と、頭まではねを上げる子がいます。その子の服は、後でかえてやらなければなりませんでした……」

私「頭の先まで汚す子はどんな子ですか」

会員「けんか早くて、時々友だちを泣かすこともあるし、みんなで何かしている時、はみ出すことも多い子です。発想のゆたかさはクラス一です」

私「いたずらっ子と、発想の面白さの関係について、一度ゆっくり話し合いたいですね……」

ビデオをみての話し合いは、いろいろな方向に発展した。若い経営者を主流としたフレールベルゼミも、メンバーは

六年間に、少しずつ入れかわった、近頃では、保育所や幼稚園の先生も参加して、男のふとい声に交じって、若い女の笑い声もきかれる楽しい雰囲気になった。
月一回、ウィークデーの六時半から九時頃まで、それぞれ疲れた体を休めたい時間に会員たちは明日の保育のために語りつづけている。

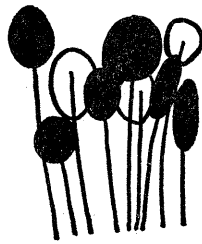
(十文字学園女子短大)

◆編集部から

この研究会だよりのシリーズでは、幼稚園・保育園の、園内での研究会ではなく、より広い人々の集い合いから、保育を探究している研究会を紹介していきます。そのような研究会を開かれている方々は、ぜひ御一報下さい。

続・保育の中の小さなこと大切なこと ③

守 永 英 子



九月の半ばを過ぎたある一日、五歳児を伴って園外保育に出かけた。母親と一緒に、実りの秋を、先ず、栗拾いで楽しもうという計画である。朝は、ちょっと雨を心配したが、日中は、うす曇りで、暑くもなく、栗拾いにはよい日よりであった。

栗林など本当にあるのかしらと思われような、にぎやかな町並をしばらく歩くと、目の前に畠が広がり、畠の向うが栗林である。

栗林は、かなりな広さで、七十組の親子連れが、竹べらやかごを持って散ってしまうと、まばらという感じである。店頭で見る、黒ずんだ茶色の栗とは違い、林の中に落ちてい

いながら飛び出した栗の、つややかな茶色は美しい。母親の中にも、初経験の人が多く、一生懸命拾っているようである。

拾っている私の耳に、親子のいるいな会話聞こえてきた。その中の一つが、聞き覚えのある声で、私の耳に飛び込んできた。「そんなものを、ぼんやり見てないで、早く栗を拾いなさい！」 T男の母親である。

ふっと、私の心に、T男のおずおずした表情が浮かび、何か激しい感情にゆさぶられて、思わず声をかけた。「時間は沢山あるから、ゆっくり拾ってくださいね。おとなは、拾うことだけを考えるけれど、子どもは、そうじゃありませんも

のね」云いながら、自分の感情が、憤りにも似た感情であることに気付いて驚いた。

T男は、おとなしい、テンポのゆっくりした子どもである。おとなの表情を気にしながら、おすおすものを言う。

母親は、大きな声で、はっきりと話し、せかせかとした雰囲気である。この単に対照的と思えたものが、実は因果関係を持っていたのではないだろうか。「粟を拾う」という目的行動の合間に、ちょっと他のものに関心をそらすという寄り道を許さない母親の態度が、無意識に、生活の広い範囲を覆っているとしたら、彼は、子どもらしい、いろいろな興味を、無下に摘まれてしまっているのではないか。子どもらしい、心の寄り道を、母親の生活の効率のために否定されるならば、おとなの顔色を見、おすおすとした態度が生まれるのは当然ではないか。私は、T男のために、抗弁せずには、いられなかったようである。

このことと対照的に、私は、M男の母親を思い出した。M男が、バスで通園の途中に、工事現場があり、彼は、その様子に大変興味を持った。母親は、彼の興味を満たすために、帰りのバスを途中で降りて、しばらく、一緒に見ていた、と

いうことであった。このことを話す様子は、楽し気で、子どもと共にあることの喜び、子どもの成長を見守ることの幸せを味わう人のゆとりが感じられた。M男は、おとなに対する信頼感を、しっかりとした土台として、明るく、子どもらしく、のびのびと育っている。

日常生活の中の、小さな事柄の、小さな違いではある。しかし、子どもと共にあるおとなが、子どもらしい当然な行動を、否定するか、肯定するか、違いの持つ意味は大きい。その積み重ねは、子どもの性格を形作っていくもののように思われる。

このようなことは、母親との、改まった話し合いの中では、見つけにくいものである。それほど、無意識に、生活の中に織り込まれた態度であり、それだけに生活の中に広く影響を持っている姿勢である。このことに、母親自身、気づき、変化できるためには、どうしたらよいであろうか。

これは、母親だけの問題にとどまらない。保育者自身、自分の行動を見つめ直さなければならぬのかもしれないと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

『復刻・幼児の教育』〈大正・昭和篇〉

〔趣旨〕

『幼児の教育』誌は、明治三十四年『婦人と子ども』と題されて創刊されて以来、今日に至る迄八十年の長きに亘り、わが国幼児保育の発展と歩みを共にして来た。この間、幾多の先駆的保育理論、実践研究発表等が誌上を飾り、わが国の幼児教育の発展に測り知れない寄与を成して来た。現在まで継続する幼児教育専門誌として、わが国最古最長であるのみならず、雑誌出版史上、極めて稀有な例を示している。

本書は、昨年刊行の『復刻・幼児の教育』（第一期・明治三十四年～大正九年）に続き、大正十年～昭和十九年の二十四年分、二十四巻を、一挙に復刻刊行するものである。大正・昭和期はわが国幼児保育が日進月歩の高進を示し、時代背景もめまぐるしい変貌を遂げた時期にあたる。

わが国の幼児教育の進歩の様相を概観する好個の原資料として、また先達の抱負や熱意の結晶する稀有な文献として、

現代保育を考える人々に資することを念願する。

〔体裁・内容〕

全二三巻、別冊著者別索引

〈第二一巻～第四四巻〉大正十年～昭和十九年

『幼児教育』（第二三巻第八号まで）

『幼児の教育』（第二三巻第九号以降）

〔刊行〕 名著刊行会

〔定価〕 現金価格二一五、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕

総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 千代田区神田神保町三二二五 精和ビル

TEL (〇三) 二九五―三五六一

大阪本社 大阪市西区北堀江三―六―二三

TEL (〇六) 五三一―九八〇一

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々が、優れた論文をおよそくいただきますことを、期待しております。

〔記〕

- 一、第一期、第二期の復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。
- 一、応募期日 昭和五十六年九月末日まで
- 一、応募要領 ペン書き（またはボールペン）とし、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上、百枚以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品 最優秀賞一名 賞金二十万円

二等賞 二名 五万円

三等賞 三名 一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問い合わせ及び応募先

〒112東京都文京区大塚二―一―一 お茶の水女子大学附属

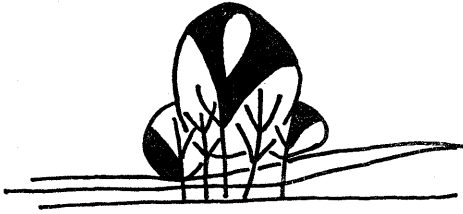
幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

尚、電話での問い合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部
後援 株式会社コーディック

子供とのかかわり

折原祥子



保育者として子供達と毎日生活していく中で、はたして「これで良いのか？」という疑問はいつも持っている。

本当に、一度位は自信を持って保育してみたいと思うのだが、全くだめで、これからも見込みがないだろうと思っている。

そこで立派な保育者になろうとは思わず、自分の好きなものを楽しみながら、ゆったりした気持ちでいられる様に、又幅の広い物の見方が出来るように努力して、子供の前にいたいと思っている。

ただ、出来るだけ多くのものに興味を示せる人間でいたいし、何かに夢中になっていられる人間でもありたいと思う。何をやっていても、保育の道に役立つように思うし、どのようなものでも、根本的に大切なものは共通しているのではないだろうか。子供達ひとりひとりの個性を―自主性を―創造性を育てる保育と、良く耳にする言葉であるが、何と難しいことか。そこで、自分がどうあるべきか考えながら、子供達ひとりひとりとのかかわりを大切にして行きたいと思っている。

このかかわりと云うのも、意図的に出来る場合より、思いがけない場合にあらわれる事が多い。これは、家庭でも云えることではないだろうか。ああしよう、こうしようと思っても出来ない事が多く、生活そのものの積み重ねの中で生まれていく事が多い。

夏休みに一ヶ月間、アメリカの家庭で過す機会があった。二歳十ヶ月になる男の子ベンジャミンと、一歳六ヶ月の女の子ニコールと云う二人の年子がいた。

私はこの子供達と毎日、お化けごっこやカウボーイごっこなどの遊びをしながら、結構楽しく過したのであるが、この子供達と両親、特に父親とのかかわり方を見ながら、幼稚園以前の子供の生活を知り、考えさせられる事も多かったのである。

両親は、特別に今どういふ教育をしようなどと構えた姿勢はなかったが、とにかく子供と良く遊ぶ。日本と違い、夕方には家に帰り、食事を一緒にし、お風呂に子供と入り、寝る迄の時間父親が遊び相手をする。医者なので、夜も帰れない忙しい時でも、食事にだけは戻り子供と遊ぶ事をする。母親まかせでなく父親の役割を果している事に感心させられた。

車で出掛けると、ベンジャミンは必ず「あの雲は何に見える？」と質問する。すると父親は運転しながら、「そうだね、ドラゴンに見えるよ」と答える。「ベンジャミンは？」と父親が云うと、「ダイナサウルス」とか、「ステゴザウルスが戦っている。」と恐竜に興味をもっている彼は答える。「祥子さんは？」とこちらにも質問が来る。「さてー」と私も何がしかの答えをする。これが一度や二度でなく何度もあった。

我々が幼稚園の子供と、庭で空の美しい時、雲を見ながらこのような会話をする。

いつももっと小さい時からこういう機会が多くあり、自然に創造する力が養われて行かれたら良いのに、と思う事があったので、この時はとてもうれしかった。

どうしてこの様になったのかを尋ねたら、「雲」という絵本がとても好きで、何度も読んでいるうち自分で創造する様になったとの事だった。

絵本も選ぶのは両親であるが、子供が興味を持ったものは、何度でも相手になり読んであげるのだが、それが少し違う。本に書いてある事をそのまま読んでいるのではなく、必ずお話にして語っているのである。

父親の考えている事、伝えたい事が絵本を通して子供に伝わっていくのである。

本も少し難しいものでも、絵が美しいとか、内容が良いと思えばどんどん与えている様であった。

動物に対する態度も、アメリカでは家族の一員である云う考えが強く、犬と猫が家の中で一緒に生活しているのだが、足をちょっと踏みそうになっても、ごめんなさいと、動物に対して自然に云う事が出来る。

見ていると両親も、意識せずやはりそのように云っているのを何度か耳にした。

又、宗教的な要素がとても大きいと思う。生活の中にキリスト教が柱としてあり、感謝する気持ち、思いやりの気持ち、すべての考え方が宗教を元として、小さい時から身につけている。日曜日には家族で教会に行き、子供達は年齢別クラスに分かれ、友達と過す場があり、大人達は、聖書研究の後、礼拝に出席し、尊敬する牧師の説教を聞き、自分自身の心の勉強をする事が出来る。

そして家庭では、その考え方が子供にかえっていくのである。妹はまだ充分話せないのだが、父親と兄との行動を一部始終見ている。

兄が父親と何かしている時には、出る場はないのだが、少しのすきまを見つけて、必ず同じ事をする。そして彼女なりに満足したり、気に入らない事があると、大きわざして主張したりする。

子供達の態度、言葉使い、親にそっくりでおかしくなる様であった。方法は良いか悪いかは別として、この様に母親ばかりでなく、父親が子供とかかわっていることは、とても大切に思う。一生懸命生活している中でも、育てる事を大切に考えている様に感じた。

両親は、「大きくなったらお金の援助しか出来なくなる。小さ

い時には精神的なものを大切に育てていきたい」と話していた。私は園で父親達が、「子供の事は母親まかせで……」とか、「夜が遅いもので子供の事は良くわからない」と云っていた事が頭をかすめたものである。

又もう一つは、このように両親とのかかわりの中で身についたものを持って集まってくる子供達ひとりひとりと、どう私達がかかわって行ったら良いかが大切な事だと思つづく感じだったのである。

S君とのこと

Sは微細脳損傷群と云われる障害をもつ年中児である。年少(三歳)で入園した時は、多動で少しもじっとしている事がなく、物をさわっては走り回っていた。道路に出て行き、バキュームカーをながめたり、近所の家の階段を上ったり下りたり、言葉も単語程度が出て来るだけであった。

少しずつでも集団の中で変わっていかれる事を期待しながら見て行く事になったが、一年間クラスの中で、又園全体の子供達と行動しながら、ほんの少しずつだが変化していった様に見える。

年中に進級し、カバンをかける場所も担任も変わった時、Sはとまどいを見せた。

始めは、自分の場所はことばかりに、元のクラスにカバンを置き、そこで遊び、お弁当も年少と一緒に食べた。私達は少しも気にならず、Sのやりたいようにさせ、様子を見ていたのだが、母親はどうも気になるらしかった。そのうち朝泣くようになる。園にも来たがらなくなった。母親から様子を聞き、少しSとかかわってみようと思った。私は年長を担任しているが、母親とも良く話をしていたので、S自身は身近かに感じていてくれた様でかわりやすい気がした。

「車にのらない？ S君」と声をかけた事から、毎日Sと一緒に行動するようになった。登園すると毎日私の所に来て、「車のろろ、押して、押して」と云う。私も押したり、引っぱったり、あきずに続いた。

ある日Sは、私の靴を指さして、「同じ」と云う。見るとSの私のと同じ靴なのである。私は偶然と思い、「あれ、同じね。どこで買ったの？」などとあまり気にもかけず、もう古くなって指先に穴があいていたので、そろそろ買い換えなくてはーと思う位だった。そうしているうち、Sは朝も調子良く登園して来るようになり、カバンは新しい場所に置き、お弁当だけは年少の部屋に

行つて食べる様になる。

私も新しい靴を買い、二足下駄箱に入れておくようになった。

始めて新しい靴をはいて庭に出て行くと、子供達は「先生の靴新しくなったネ」等と云っていたが、Sはいつものまにか古い穴のあった靴を持って来て、「先生こっちはくの」と云ったのである。

私はハッとさせられずはきかえ、Sに悪い事をした様な気持ちになり、心の中であやまった。そうして新しい靴は、子供のいる間ははかれずに下駄箱に入っている事になり、捨てられるはずの靴が活躍することになった。Sはそうして車から砂場へ、砂場からブランコへと遊びを移しながら、次第に落ちついて行き、喜んで登園するようになる。

担任もSと出来るだけかわるよう声をかけ、年少の先生も前と同じように見て行く毎日だった。そのうち古い靴も自然に新しい靴に変わって行ったある日のこと、Sは私のそばに来て、足を出し私の足と並べる。見ると又同じ靴をはいている。私の方が驚いてしまった。今度は偶然とは思えない。母親に聞いてみると、「デパートでこれ買うって聞かないんですよ。先生のと同じだったのですね」そういうわけで、親子のように又同じ靴をはいている。Sも二学期には驚く程成長してくれた。座っている事も出来るようになり皆を驚かせた。それと同時に友達と遊べるようになって

た。それまでは一人でいるか、先生と一対一のかかわりしか出来なかった。しかし、友達とブランコをこいだり、話しながら手をつないで歩いたり、仲間として認められるようになった。

Sは私が今まで見て来た子供の中で一番多動で、変化して行く様子も遅くどうなる事かと思つて来た。このように、ちょっとした物や言葉を媒介としてかかわりを持つた時、気もちが通じる様になる。この様なかわりが、子供の成長には大切なのだらうと思つう。

T君とのこと

Tは年長児である。Tは二年保育で入園したのであるが、上目づかいで人を見るような、暗い感じのする子供で友達の中に入つて行くにも時間がかかる。入つてしまえば体格も良いし、とても活発な面も持っているので、発揮出来るのだが、そうなるまで、とても時間がかかる。そのTに変化があった。

母親が亡くなってしまったのである。一月に急に病気で倒れ、四月末に亡くなったのであるが、その間祖母の所に預けられた。

年中の三学期は全くお休みし、五月の連休の後、久しぶりに登園して来た。

顔を見ていると、本当にかわいそうになつてしまふのだが、子供の事を考えると出来るだけ強く頑張れる様になつてほしいと祈りつつ、私達の出来ることは、思う存分生活出来る園での場を作つてあげること、気もちを少しでもわかつてあげる事だと思ひ、様子を見ていた。

ある日の昼食後、すもうをしていた時である。始めは仲間に入りたくても横で見ているのだが、ちょっとした誘いの言葉で仲間に入つて来た。タイミング良く、とても云うのであろうか。すると驚くばかりに力を出し、汗を流して何度もくづつかつて来る。

こちらも驚きながらも真剣に、時間も忘れてすもうに熱中した。最後は両方共、マットにひっくり返るほど力を出しきり、何かすっきりした感じだった。

Tも今迄のもやもやが吹き飛んで心の中がすっきりしたような笑顔でいた。

次の日から別人のようになったわけではない。やはり誘つてもすぐには入つて来ない事もある。でもあのすもうで何だかTのことがわかる気がして、誘つて、来なくても心配でなくなったのだ。

ある時絵の具の水を床にこぼして、水びたしになった。「あれ、大変！」ときげぶ私の所にTはだまって雑巾を持ってかけつけ、

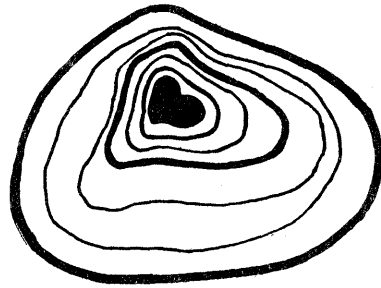
バケツに絞つては又ふいて、と一生懸命やってくれた。まわりの子供達も、こぼした本人ですら、まだ何もせず立っている時であった。

私は感激してしまい、ますます認めてあげられるようになったのだらう。T君は大丈夫と云う確信のようなものが出来たのである。

このように、どこにでもある小さな事が、私にとってこの仕事を続けさせ、おもしろいものとしている様に思う。

いろいろな家庭環境に育つて来た子供達、親といろいろなかわり方をして来た子供達、みんな違うけれども、一人一人に何かの型でかわり、心が通じあえたらうれいと思う。今年も又、悩み、考え、喜びを味わいながらひとりひとりとのかわりを大切に生活していきたいと思う。

(神奈川・松ヶ丘幼稚園)



遊びと子どもの発達 ⑧

加古里子

描画の遊び (その1)

人間の子は出生時、既に人声を聞きつけ、瞳をその方向にむける。そして14週たつと、人間の顔を認知し、順次微笑や注目反応をあらわし、周囲の対応や刺激によりその識別も応答も迅速深化をとげてゆく¹⁾。感情、情緒の分化は身ぶりや表情となつてあらわれ、周囲の連動行為の反映から、好嫌、快否、良悪の知覚認識へと発展してゆく。こうした視覚映像の認知と感情の分化は、ことばという音声の抽象的刺戟とあいまって、やがて子どもに概念や

観念の把握、認識という精神的発達をもたらす。

一方生後3〜4月になると、簡単な手近の物をさわることから始まり、6〜7月では手指を口に入れ、個々の指を動かす事を感じる。それはやがて一年前後で、紙などをやぶき、こわす動きとなつてくる。物を正しくつかみ、にぎり、持つに至るには一歳半から二歳までの習熟期が自由な行動を許された子どもに於いても必要となる。こうした時期、たまたまにぎって、たたいたり、こすりつけた跡が、明瞭な線や形、色のちがひとなつて現れた事を知った時、子どもは進んでその物によって生ずる軌跡をつくり、それをたしかめ、遂には自らの手によってつくりあげたその



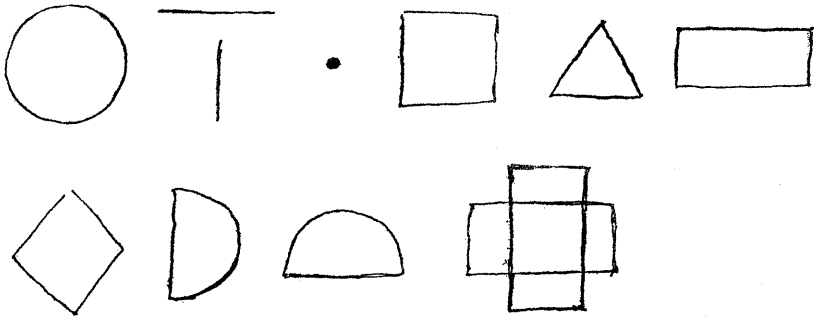
跡を楽しむ事となる。こうして掻画とか錯画とか乱画とかよばれるながりがきの時代に子どもは突入してゆく。

そうした跡を分類整理する時、点や線や重なりやうねうねや円などの基本的スクリブルとよばれる図形群に分解する事が出来る。最初何の気なしに出来た跡を楽しんでいた子どもは、前述した他の知的発達との共同作業によって、その基本スクリブルの中に、子ども自身のいだいた概念や観念を内包させる事となる。指の動きの発達と描写の習熟は、やがて自らの概念や観念を表現し、表現しようという意図となる。自分を愛してくれる母親の顔は丸く、そして目や口がある事を表出しようとする。通りでみた大きなトラックが、ごおーとはしっていたのをつたえようと

する。当然それは概念的表出であり図式化された線図となる。知的概念が深まり、手や指の描画能力がどんどんとのびてゆきはするが、通常手や指の表現能力よりも、思考や空想といった知的発達の方が上まわってゆくため、描出されたり、模写された画像に対し、それを描いた子ども自身は、自らの意が満され表出しつくせぬ不満を抱く。

三―四歳頃の、現実生活の中で、自らの概念や考えを自由にはばたかせ、大人の側からは空想や夢やアニメイズムと呼ばれる時期になると、その落差は大きく、自らの考えや自覚もはつきりとしてくる。その為かえって知的面が発達した子どもほど、ますます図式化様式化する傾向となる。

その脱出の方法が三つある。一つはその図式化様式化を象徴画とか概念画とよばれる事で過す事である。その二は正攻法として自ら表現したいと意図したものをその通りに表出しようする技術の習得、即ち描写技術としての視覚的写実力と透視画手法の獲得である。美術教育という見地から、第一の方法の不可である事と、第二の道の困難で成功率の低い事がすぐにも予想される。そこで第三法として、子ども自身が考えたり思ったり或はあらわそうと願っているものを一旦否定し、そこから別な手法と意図、そして意欲を誘出させるといふ方法が概ねとられている。³⁾



美術教育面での問題はさておき、子ども達の成長過程にあって、当然の事ながら画像をえがき、映像を識別する機会が数多く現出する。遊びの世界に於いてもこうした描画映像処理をさせて通る事は出来ない。そうした場で子ども達は次のような原則にも⁴⁾とついた行動と状況に出会う事となる。

① 画像映像を描出制作する時、たとい一人で行いえても、遊びの場では必ず他の子ども達の目にふれ、その自由批判と毀誉褒貶にさらされる事となる。そして又、他の子のかいた同種同意の画像との対比優劣の洗礼をうける事となる。これは子どもにとって、誠に厳しい、そしてこの上もないよき試練、自省自覚の場となる。

② 自分だけの満足と共に、他の子の認知も得る事ができるような客観性の為、画像形成は前述した基本スクリブルよりも、もっと単純明快な形状、即ち円・線・点・四角・三角・長方形・半円・菱形といった群の組合せや総合をとる事となる。

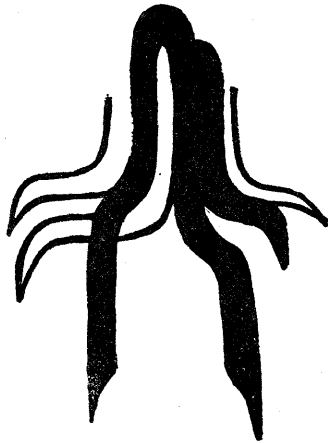
③ そしてその難易簡便さから、前述の順序で略出現頻度が規定される事となる。遊びの場にあつては、描画や映像認識がその目的ではない。手段であると共に、それは遊びを構成する一部分である。従つてそれを使い、それを楽しみ、それを重視す

るが、それだけを偏重する事もなければ、全く無視する事もない。描画という要素と共に、歌や、ことばや、身ぶりや、ゲームや、規則やしやれや風刺や、体力や智力や、地形や天候や、周囲の状況変化等を混然として、それが総合集積という形で、子どもを囲繞し包含し、本人も構成員も周囲も意識せぬ間、明らかに成長への道をたどっている一過程である。

それでは、そのような描画遊びの実体はどのようなものであるか？

(つづく)

- (1) Fantz, R.L. Science. American, 204, 66~72 (1961)
- (2) Kellogg, R. Analyzing Children's Art. E. Tuttle Co., (1969)
- (3) 加古、児童画の発達と教育の問題点、川崎セツルメント児童部資料(昭25)
- (4) 加古、絵あそび子ども会、子どものしあわせ、10月(昭33)



* 海外文献紹介 *

子どもと共に笑うということ

Mary Louice Aho

Child Education Oct. 1979

ここに、オレンジジュースをこぼした一人の園児の話がある。

先生は、子どもに厳しい口調で尋ねた。もしあなたが、家でそのようなことをしたら、あなたのお母様はどうなさるかしらね。

その子は、こう答えた。「一つだけ言えば、ママは、そこにはただ立っていないわ。」

このような体験は、子どもと接する多くの者にとって日常茶飯事だろう。子どもは単純なジョークや素朴なユーモアを巧みに笑い飛ばす。つい、こちらもつられて笑ってしまふ。子どもと笑いには、深く考えさせられるものがある。

その手掛りとして、Mary Louice Aho (テキサス大学) の「子どもと共に笑うということ」(Laughing with children)を紹介してみようと思う。

—子どもはなぜ笑うのだろうか？

それはどうも、過去に学んできた概念や活動パターンに矛盾している体験をした時に、可笑しいと感じるらしい。視覚的刺激的現象とおもしろそうな状態を、奇妙な歪んだものとして知覚した子どもは笑うのだという。サーカスの道化師等、子どものお気に入りのもは、お決まりのものからの離脱を代表しているし、マンガもよく矛盾状況を提示している。子どもはマンガを見て、言語を使わずに描写された意味を楽しむが、大人は活字を読み、知的解釈を通して、同じマンガからより洗練された意味を抽象する。つまりそれなりの楽しみ方ができるといふわけで、『ドラエモン』が幅広い読者を有するのもうなすける。

当然ながら、子どもは自らの認識レベルに応じてジョークを理解するが、大切なのは、各理解段階におけるそのジョークを理解しようとする最大限の挑戦的意気込みだといふ。

—教師は、クラスで何をすべきだろうか？

まず、子どもとユーモアを楽しみ、適切な評価を下さなければならぬ。それは、クラスの雰囲気をつくり、子ども達の笑い振りからその子の心身の状態を伺い知ることができるところであり、良いユーモアには良い評価を与えることで、たとえばクラスを笑わせることのできる子どもは、積極的な自己イメージを築き易いからである。

また、クラスに笑いを持ち込もうと思ったら、教師が子どもの認識レベルに応じたユーモアをことばや絵を使って示し、子どもにゲームができる時間や環境を与えるのも良いという。

以上、概要を述べたが、いかにもユーモア溢れる人間が求められているアメリカで書かれた文章だと思わせる節が、なきにしもない。

そこで私なりに、なぜ可笑しいと感ずるのかという問いではなく、人が笑った時に何が起こるのか？ という問いをたてて、少しばかり蛇足をつけさせて頂こうかと思う。

微笑、哄笑、泣笑、微笑、失笑、憫笑、嘲笑、冷笑……。大きな辞書に依れば、えんえん列挙できそうであるが、ここにふとした笑いに愛を感じた女性がいる。四国巡礼の旅上、二十四歳の高群逸枝である。

逸枝が疲れて道端の石垣に休んでいると、傍らの小店から出てきた猫の子が、彼女の腕い、だ笠に戯れかかり、やがてその中で寝入ってしまう。その一部始終を見ていた店のおかみと逸枝は、ふと顔を見合せて同時に笑った。逸枝にとってこの猫の子によって引き起こされた一瞬間の両者の笑いは、階級的立場を超えて純粹なものだったという。さらに、人間の善と、その自由な発露を妨げている世俗的なものの存在を感じ、一切の障害物が除かれ

るなら、人間は惜しみなく愛し合うものだと悟ったという。

素直な心から湧き出づる温かい笑みは、人から地位や容姿の差といった外枠を意識から消滅させ、人を共通の基盤の上に立たせる。そこは、窮屈なベルソナを一時脱ぐことが可能で、人間の共通理解を助ける愛の源泉でもある。

この論文には、「子どもと共に学ぶ者にとって実践的な意味のある、笑いに関する研究……」という見出しが書き添えられているが、私は、この論文を通じて、著者の読者に向けた八ここで今一度、子どもと笑いについて立ち止まって考えてみようではないかVという強い呼びかけを感じた。私は、著者について何一つ知らない。けれども、そんな私が僭越にも筆をとったのは、この意図に心動かされたからである。

子どもと共に笑えることは、子どもの世界に接近するための主要な関門の一つであり、愛ある人間理解への貴重な一歩となるだろう。

(柿澤良子)

* 高群逸枝『火の国の女の日記(上)』

正月

日本の子どもが、揃って、一斉に、一つ宛大きくなったと思うと、心の底からはほほ笑ましくなる。

正月は、誰にも齡を一つ宛持つて来て呉れたのであるが、子どもら程、それを喜び受けたものはあるまい。あの可愛い指で、自分の新しい齡を数えている。あの可愛い口で、自分の新しい齡を誇っている。実際正月が公平に分けて呉れた齡の中でも、子どもらの分は黄金の特製で、どれもこれも一つとして輝かしい光に輝き光っていないものはない。

——倉橋惣三「育ての心」より——

新年と共に一斉に加齢するという風習が、姿を消してから既に久しい歳月が流れた。然し、子どもたちにとって、やはり新しい年は、「黄金の特製」で訪れてくるのではないだろうか。

「初日の出」は、創造の日の光さなが

ら、キラ／＼とまばゆく、「おめでとう」の声は、天地の始まりを告げて爽やかに響くことだろう。子どもらの前に、世界は、まさに新しく、いま、生まれ出たのである。

大人である私どもは、子どもらの新年を共有し、彼らの心を心とすることによって、「時のよみがえり」を体験することとが出来た。人と世界は、こうして、子どもの存在において、涸渇から免れ、みず／＼しさを回復するすべを手に入れようとするのだ。

新年と共に、本誌は、八十年の歩みをすることになる。題字、装丁、カットすべて装いを改め、書も画も、いずれもお若い方々にご苦勞を願った。八十年という年輪を重ねたがゆえの確かさに立ちながら、同時に、若い力によって活性化されつつ、常にみず／＼しくありたいと願うこと、切である。(本田和子)

幼児の教育 第八十巻 第一号

一月号 © 定価二七〇円

昭和五十五年十二月二十五日 印刷

昭和五十六年 一月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

118 東京都港区三田四ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

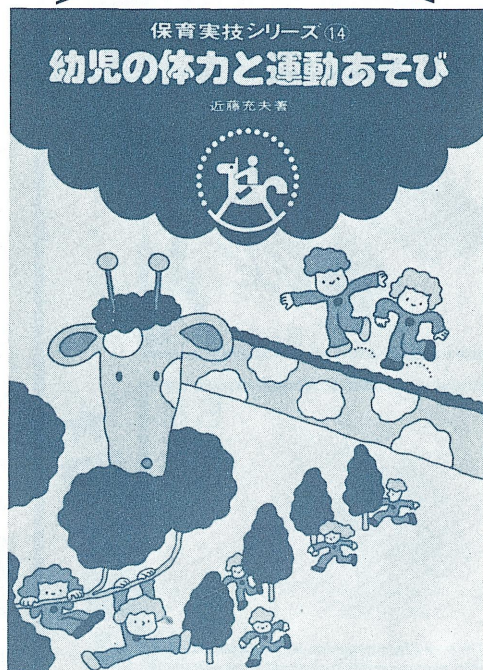
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いいたします

好評発売中!!



幼児の体力と運動あそび

近藤 充夫・著

B5判・128頁・1,000円 定価250円

幼児の体力づくりを、発達の姿に即して無理なく指導できるように、さまざまな運動能力のテストの実際と測定法、テストの活用の仕方など豊富なイラストを挿入して解説されているので、保育の場に役立ちます。

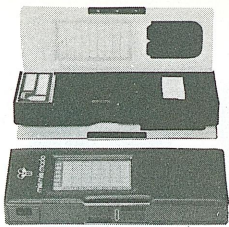
たのしい思い出をこめて
フレーベル館の 卒園記念品

★**新製品がズレました。**

児童画アルバム
 D-1(1,300円)
 D-2(1,550円)
 D-3(1,750円)



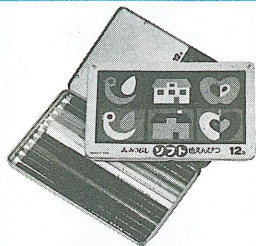
ふで入れ(赤・黒)
 各850円



三菱
 かきかたえびつ
 各600円
 (個人名入り)

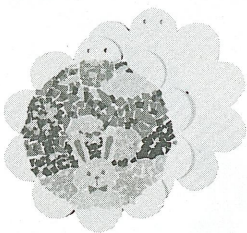


三菱ソフト色えんぴつ
 12色 600円

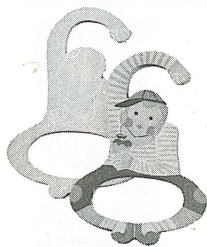


★**記念制作にズレた。**

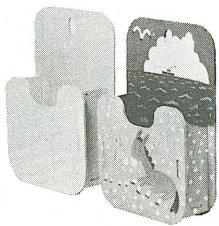
花絵皿
 50円



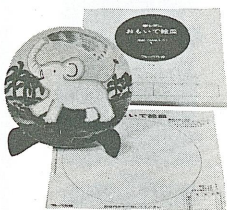
タオルかけ
 220円



状さし
 450円

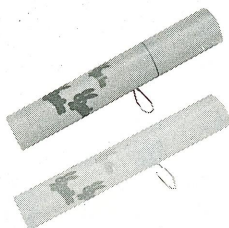


おもいで絵皿730円
 絵皿用紙50枚1組
 200円

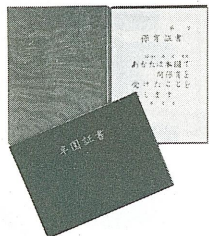


★**証書を美しく
 保存します。**

証書用筒
 150円



証書用ファイル
 330円



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館